訓点資料語彙の電子データ提供に向けての実践的試みⅡ
―高山寺蔵『蘇磨呼童子請問経』巻上保延三年点仮名点箇所訓読文用例集―

大久保綾子

本文凡例

一、本用例集は、高山寺蔵『蘇磨呼童子請問経』巻上（保延三年点）の本文を底本として、その仮名加点箇所の本文及び検索用語を出現順に列挙したものである。

一、底本には朱筆と墨筆による二種類の加点が確認されるが、訓読文では前者（朱点）には何も付さず、後者（墨筆点）には「　」を付すことで両者を区別して示した。

一、用例を掲出する際には、仮名加点の存する箇所を中心に、一文単位で掲げることを基本とした。但し、文章が長文となる場合等一部用例においては、一つの文章を分割して揚げたものもある。

一、不体裁ながら、検索の便宜上、用例の改行後に行頭の空白を置かなかった。

一、訓読文は底本のヲコト点を平仮名で示し、仮名は底本同様片仮名で示し、私に補読した語句は平仮名を（　）に包んで示した。不読の漢字は［　］で包んで示し、再読字の二度目の読みも、「當に…［當］（再讀）し」のように［　］に包み（再讀）と併記した。

一、底本の符号も、合符は訓読文に生かして示した。その他、音読符・訓読符についてはそれぞれ（音）（訓）の文字を、声点については（平）（平輕）（上）（去）（入輕）（入）などの文字を当該漢字の右下に注記した。また返点は、（返）（一）（二）（三）といった注記により同じく当該漢字右下に示した。

一、底本の二行割注は、訓読文では一行流しとし、その前後を〈　〉に包むと共に改行箇所については冒頭にくる文字に／を付して示した。

一、句読点は、底本に従って、右下「・」を句点「　。」で表し、中下「・」を読点「　、」で表した。句読を記すべき所に句読点のない箇所は空白として表し、私に補うことをしない。

一、漢字の字体は活字正字体に従うことを原則とした。

一、所謂、誤字・宛字については底本のままに翻字したが、場合によっては私見を注記した箇所もある。

一、片仮名の字体は現行の字体に改めた。

一、漢字の送り仮名に仮名点とヲコト点が併記されている場合には、「如法に（ニニ）」のように、墨点を朱点のルビとして表現した。また、一つの漢字の読み仮名に二つ以上の仮名点・ヲコト点が付されている場合には、「錫（シ〔ニシ〕ニヤク）」のように「朱点〔墨点〕」という形で示した。

一、外字の表示に際しては、当該漢字が存在する箇所に「Ⅱ〔日＋木〕」のように示した。

一、虫損・破損により本文の字句が欠落した箇所、及び文字は確認できるものの判読できなかった箇所は□によって示した。その場合の検索用語は、残存の情報からの推測により語彙を特定し掲出したものもある。

一、用例の所在、検索用語等の情報は、用例毎に文末に（　）に包んで示した。またその際には（巻（上下）用例の所在行数、検索用語）の順に掲げ、所在行数に関しては当該用例冒頭にあたる漢字の所在行を基準とした。

一、補読箇所の表記について

私に補読した語句の表記は、左の各項に従った。

（1）仮名遣は、原則として、歴史的仮名遣による。

（2）活用語尾の補読は、原則として、音便にならないもとの活用形によった。但し、一定の四段活用動詞の連用形が「テ」に続く等、音便形として使用された可能性が高い用例の場合には、「従（シタカ）テ」の如く、当該部分の活用語尾を補うことはしない。

また、活用しない語や活用語でも語幹などに音便を含む語のうち、当時既に音便の形が定着していたと思われる以下の語は、音便の形を以て基準とした。

於（オイ）テ　以（モツ）テ　（補読では「ツ」は表記しない。）

（3）補読には濁点は一切加えない。

一、検索用語について

各用例毎に検索用語を決定する作業においては、左の各項に従った。

（1）検索用語は、電子テキストとしての検索の便を考えて、和語は平仮名で、字音語または字音語に準ずるものは片仮名で語形を掲げた。

（2）語の掲出は単語単位を基本とする。

（3）当該語句が訓読文中に活用語（用言及び助動詞）として現れる場合、終止形での掲出を基本とした。

（4）当該語句が訓読文中に音便形で現れる場合、原則として、音便にならない、もとの語形を揚げた。但し例外として、以下の語については音便形を採用している。

以モツテ　於オイテ　（検索用語では「ツ」は表記しない。）

（5）用語掲出の際の仮名遣いは、底本の表記体系に準ずることを基本とした。但し、検索の便を考慮して、底本の仮名加点が歴史的仮名遣と異なる箇所については、底本表記の後に（　）に包んで歴史的仮名遣による表記も併記した。（「己」「・をのれ・（・おのれ・）」等）

（6）字音語の掲出においては、まず仮名の付されていない漢字は「‐」で、仮名の付されている漢字はその読みを表記するかたちで表した。（「闍闇」「・クワイネウ・」　「山腹」「・‐フク・」　「囉枳當伽」「・ラ‐タ‐・」）

しかし、これだけでは検索の便に堪えうるものではないため、その下に（　）に包んで、当該語句の読みを全て呉音で示した。（「闍闇」「・クワイネウ・（・ヱネウ・）」　「山腹」「・‐フク・（・センフク・）」　「囉枳當伽」「・ラ‐タ‐・（・ラキタウギヤ・）」）

一、注について

必要な注は、各用例毎に、用例及び検索用語の掲出後に＊を付して小文字で記す。

○蘇磨（上濁）呼童子請問經伴侶分第一（上01、・‐バ‐‐‐・（・スバクヅウシ・））

○爾の時執金剛菩薩・大藥叉（上）將・威・千の日（返）に勝（れ）「タリ」［イ、勝「レテ」］心（返）「ヲ」一（に）「して」。［而］住（したま）「ヘリ」・（上02、・の・に・たり・すぐる・て・を・たまふ・り・）

○時に大悲者・蘇磨（上濁）呼（上）童子・（上03、・‐バ‐‐‐・（・スバクヅウシ・））

○坐（返）從「リ」而「モ」起（ち）虔（平）―誠（平輕）「ニ」・執金剛菩薩の「ミ」足（返）を頂―＊禮（し）已（り）て［イ、已（り）「ヌ」］諸の明主及（ひ）眞言等の成就の法（返）を問（はむ）と欲（ふ）か［イ、欲（ふ）「ニ」］故に是（返）（の）如き言を作る。（上03、・より・しかも・ゲン‐なり・（・ゲンジヤウなり・）・み‐・（・みあし・）・を・ぬ・と・に・）

＊「禮」　右傍に「リ」（朱筆）とあるが、未詳。

○我れ世間を見（る）に眞＊言（返）「ヲ」求（む）「ル」者節―食して持誦し・專心に［イ、心（返）（を）專（し）］勤苦「ス」。（上05、・を・もとむ・‐‐‐す・（・ゴンクす・））

＊「言」　右傍と左傍、それぞれに「ヲ」（墨筆）とあり。

○＊是（返）（の）如（く）修行スレトモ仍（ほ）成就「セ」不。（上06、・‐‐‐す・（・シユギヤウす・）・‐‐‐す・（・シユギヤウす・）・ども・‐‐‐す・（・ジヤウジユす・））

＊「是」　「＝〔日＋木〕」字を重書にて訂す（墨筆）。

○唯（た）願（はく）「ハ」尊者・成就（返）（せ）＊不「レ」

因縁を分別し解「―」説「シタマヘ」（上06、・は・ず・‐‐す・（・ゲセチす・）・たまふ・）

＊「不」　左傍仮名は底本のまま。

○尊者の威徳・日の光（の）盛「ル」（か）如（く）して演（返）（へ）「タマフ」所の眞言「ハ」・能く諸の闇（返）を破し復（た）能（く）衛護して及（ひ）諸の罪を滅「ス」。（上07、・さかる・たまふ・は・‐す・（・メツす・））

○云＊何か因（返）を修「シナカラ」復（た）果を獲[ヲ]不[エ]「ル[サ]」。（上08、・‐す・（・シユす・）・ながら・を・う・ず・）

＊「云」　「方」字を重書にて訂す（墨筆）。

○所求の眞言の上中下品の種種の悉地を假―使（ひ）具に修スレトモ亦（た）成就（せ）不。（上10、・‐す・（・シユす・）・ども・）

○若―[モ]＊以シ［イ、若（し）以「ニ」］法（返）に依（り）て［イ、依「レトモ」］成就（返）（せ）不ラム者［イ、不「レハ」［者］］［イ、不者］便「チ」眞言（返）を棄「テ」て［而］无明に順[シタカ]「ヒナム[ス]」。（上11、・もし・すでに・よる・ども・む・ず・ば・ず・すなはち・すつ・したがふ・なむ・）

＊「以」　左傍に「已借音也」（墨筆）とあり。

○＊癡（返）を以（て）惠（返）を覆フレハ療[レウ]治「ス」可（から）不「ト[ス]」。（上12、・おほふ・ば・レウ‐す・（・レウヂす・）・ず・と・）

＊「癡」　左傍に「フ」（墨筆）とあるが、未詳。

○若（し）眞言・成就（返）（すること）獲[エ]不[ス]「ト」説（き）「タマハヽ」亦（た）惠（返）を覆（ひ）て治（返）（す）可（き）者无き（か）如し。（上13、・う・ず・と・たまふ・ば・）

○唯（た）願（はく）「ハ」尊者・大悲（返）を以（て）の故に眞言（返）「ヲ」敷演して衆生を救脱し（た）「マヘ」。（上13、・は・を・たまふ・）

○彼[かれ]若（は）念誦し＊兼ては護―＊吽摩（返）を作[ナ]「サムト」（上14、・なす・む・と・）

＊「兼」　「惡」字を重書にて訂す（墨筆）。

＊「吽」　「呼」字を重書にて訂す（墨筆）。

○云＊何「カ」明主の・成就を與「ヘ」不「ラム」。（上15、・いかにか・あたふ・ず・む・）

＊「何」　右傍に「口カ」（墨筆）とあり。

○法「ノ」・具（返）（せ）不[サ]「ルナリトヤ」爲[セ]「ム」（上15、・の・ず・なり・とや・す・む・）

○力（返）「ノ」无（きなり）「トヤ」爲[セ]「ム」耶。（上16、・の・とや・す・む・）

○時節に由（るなり）「トヤ」爲[セ]「ム」。（上16、・とや・す・む・）

○罪（返）「ノ」有（るなり）「トヤ」爲[セ]「ム」耶。（上16、・の・とや・す・む・）

○眞言に加―減（返）有（るなりとや）爲[セ]「ム」耶。（上16、・す・む・）

○供養法の・具足（返）（せ）不（るなり）「トヤ」爲[セ]「ム」耶。（上17、・とや・す・む・）

○願（はく）「ハ」衆生（返）の爲に分別「シ」解説（したまふ）「ヘシ」。（上17、・は・‐‐す・（・ブンベチす・）・べし・）

○時（に）執金剛菩薩大藥＊叉將・當に妙＊膊（ハク）の是（返）（の）如（き）問（返）（を）聞「キ」已（りて）須―臾目（返）「ヲ」閉（し）「て」［而］思惟（す）。（上18、・-ハク・（・メウハク・）・きく・を・）

＊「叉」　「又」字を重書にて訂す（墨筆）。

＊「膊」　右傍に「普各反」（墨筆）とあり。

○即（ち）手（返）を轉（して）妙拔折羅（返）（を）執（り）［イ、手執「返」「ヲ」轉（「メクラ」）「シテ」妙拔折羅］悅「―」目「ヲモテ」告―視「シて」・是（返）（の）如（き）言（返）（を）作（さま）「く」（上19、・を・めぐらす・て・を・もて・-・-す・（・コクジす・））

○奇シキ哉（カナ）（上20、・あやし・かな・）

○諸の衆生の類（返）を愍念「スレトモ」由（ナホ）シ月の光の普く世間を照（す）か如（く）して［イ、如「シ」］。（上20、・-・-す・（・ミンネムす・）・ども・なほ・し・ごとし・）

○汝か此の心を［イ、心「ハ」］極て清淨（返）（なる）「ニ」縁（る）「カ」＊放に・已「ニ」一切の諸の大菩薩に超（コ）エ。（上21、・は・に・が・すでに・こゆ・）

＊「放」　『大蔵経』では「故」字とする。

○菩提薩埵は己か＊藥「ヲ」求（め）不（「す」）。（上22、・を・）

＊「藥」　『大蔵経』では「樂」字とする。

○有情（返）「ヲ」利（せむ）か故に・能（く）大苦を忍（ふ）。（上22、・を・）

○是「ノ」故（に）菩薩「ハ」・衆生の苦（返）を見て＊菩薩亦（た）苦して［イ、苦「ス」］・衆生の樂（返）を見て菩薩亦（た）樂「ス」。（上23、・この・は・-す・（・クす・）・-す・（・ラクす・））

＊「菩」　本行では「薩」字の下に記したものを、転倒符で訂す（墨筆）。

○汝か心「ノ」・終「ニ」　己（「ヲ（の）レ」）　か（「カ」）爲　「ニセ」不（「ス」）「して」。衆生（返）を利（せむ）か故（に）是（返）（の）如（き）問を發「スト」。（上24、・の・つひに・をのれ・（・おのれ・）・が・ため・に・す・ず・おこす・と・）

○是「ノ」故「ニ」須臾心（返）を一（に）して思惟（せよ）。（上25、・この・に・）

○吾當「ニ」汝（返）「カ」爲に妙眞言の法を分別して［イ、分別「シ」］解説（せむ）。（上25、・まさに・が・-・-す・（・ブンベチす・））

○＊若（し）我か眞言（の）法（返）「ヲ」持誦（すること）有（る）モ應（に）是（の）如（く）作（す）［應］（再讀）（し）。（上26、・を・も・）

＊「若」　同字の上に丸印（朱筆）あり。右傍・上欄に「一」（共に朱筆）とあり。

○先（つ）諸佛（返）「ニ」於（て）深く恭敬（返）「ヲ」起「セ」（上27、・に・を・おこす・）

○次「ニ」无上大菩提心「ヲ」發して貪瞋癡憍慢等を遠離「せよ」。（上27、・つぎに・を・）

○復（た）三寶（返）「ニ」於（て）＊兢（ウヤマ）フテ［イ、兢「ニ」（「ツネ」）］珍＊重に懷（へ）。（上28、・に・うやまふ・て・つねに・）

＊「兢」　下欄に「几仍反／戒齊也」（墨筆）とあり。

＊「重」　右傍に仮名（朱筆）があると思われるが、一部虫損により未

詳。「チョウ」か。
○亦（た）應（に）虔―誠して深く我（返）（を）恭敬（し）及―以（ひ）大金剛部を＊遵（シ（たか））（ひ）崇（アカ）ム［應］（再讀）「シ」。［イ、亦（た）應（に）虔誠（して）深（く）我（を）恭敬（す）［應］（再讀）（し）及以（ひ）大金剛部（を）遵―崇して］（上29、・したがふ・あがむ・べし・）
＊「遵」　右傍に「シ口」（朱筆）とあり。
○亦（た）酒（返）（を）飲（み）及以（ひ）宍「ヲ」食（「クラ」）「ハ」不。（上31、・を・くらふ・）
○若（し）衆生（返）有（りて）邪見（返）「ヲ」行「ハ」者（「ハ」）身口意（返）「ヲ」以「テ」善業（返）「ヲ」作（すと）雖（も）邪見「ヲ」以（て）「ノ」故「ニ」變「して」不善（返）（と）爲（り）「テ」雜染果「ヲ」得。（上31、・を・おこなふ・ば・を・もて・を・を・の・に・て・を・）
○譬「ハ」田（返）「ヲ」營（イトナ）ムに時節（返）「ニ」依（り）作（す）トモ種子若（し）燋（コカ）レヌレハ終「ニ」芽（返）「ヲ」生「セ」不（る）「カ」如「シ」（上33、・たとへば・を・いとなむ・に・とも・こがる・ぬ・ば・つひに・を・-す・（・シヤウす・）・が・ごとし・）
○愚癡邪見「モ」亦復（た）＊是（の）如（し）。（上34、・も・）
＊「是」　「日＋木」字を重書にて訂す（墨筆）。
○假―使（ひ）善（返）「ヲ」行「スレトモ」終（に）果（を）獲不（「す」）。（上34、・を・-す・（・ギヤウず・）・ども・）
○是（の）故「ニ」應當（に）邪見（返）「ヲ」遠離（し）恆「ニ」正見（返）「ニ」依（り）「テ」［而］動搖（せ）不（る）［應當］（再讀）（し）。（上35、・に・を・つねに・に・て・）
○當「ニ」須く十善「ノ」法（返）「ヲ」修行（せ）者（「ハ」）甚深微妙（の）［之］＊法（を）增長す［當］（再讀）（し）。（上35、・まさに・の・を・ば・）
＊「法」　右傍に「ノ」（墨筆）とあるが、未詳。
○＊若（し）天龍阿修羅等及（ひ）血肉（返）「ヲ」食（ふ）諸の鬼等の類（返）有（り）て世間（返）に遊行して有情（返）を損害して［イ、損害「シ」］持誦者（返）「ヲ」惱して［イ、惱（「ナヤマ」）「シ」］心（返）（を）令（て）［イ、［令］心「ヲシテ」］散亂（せ）［令］（再讀）（む）。（上36、・を・-す・（・ソンガイす・）・を・なやます・を・して・）
＊「若」　同字の上に丸印（朱筆）あり。上欄に「五」（朱筆）とあり。
○我か妙眞言（返）「ヲ」修行（する）者（返）を見「テ」彼等＊目（「ヲ（のつか）」）（ら）恐怖（の）［之］心「ヲ」懷「く」。（上38、・を・て・をのづから・（・おのづから・）・を・）
＊「目」　『大藏経』では「自」字とする。
○此の法「ハ」彼（返）與極（て）相違「セルカ」＊故「ニ」・（上39、・は・-・-す・（・サウヰす・）・が・に・）
＊「故」　本行では以降に「四本云目然恐怖不能侵惱三本云即生恐怖使念誦人令退幷」という文を続け、下欄に「此ハ別ニ付文也」（朱筆）と注す。
○修行者（返）「ヲ」惱（し）退―心セ令―使（む）。（上41、・を・-・-す・（・タイシムす・））
○彼等（返）を令（て）［イ、［令］彼等「ヲシテ」］損（返）（せ）

令（め）不（らむと）欲（は）者（は）應（に）須（く）此の大三昧耶漫荼羅の法に入（る）［應］（再讀）（し）。（上41、・を・して・）

○諸の大聖衆・及―與（ひ）諸の＊天ノ所居の住處なり。（上42、・の・）

＊「天」　「矢」字を重書にて訂す（墨筆）。

○亦復（た）須（く）諸の事法（返）を作（つくク）「ル」妙慢荼羅に入「ル」［須］（再讀）「シ」。（上43、・つくる・いる・べし・）

○諸の障（返）を爲「す」者（返）を摧伏して＊調伏セ使―令ムルニ猶（ヨ）ル。（上44、・‐‐す・（・デウブクす・）・しむ・に・よる・）

＊「調」　本行では同字の上に「誦」字があるが、未詳。

○是（の）故に慇懃に法（返）「ノ」如（く）之「ニ」入（れ）。（上45、・の・に・）

○亦（た）應（に）須（く）諸「ノ」眞言主の大漫荼羅に入（る）［應］（再讀）（し）。（上46、・の・）

○＊譬（は）車乘「ノ」若（し）輪輞（マウ）（返）「ヲ」＝〔門＋報〕（き）「ツレハ」假「｜」令「ヒ」善く＊＝〔人（モヨホ）＋却〕セトモ［イ、善（き）＝〔人＋却〕「音」「去」「ナレトモ」］終（に）進（返）（む）「コト」能（は）不（る）か如（し）（上47、・の・‐マウ・（・リンマウ・）・を・つ・ば・たとひ・もよほす・ども・なり・ども・こと・）

＊「譬」　同字の上に丸印（朱筆）あり。右傍・上欄に「三」（共に朱筆）とあり。

＊「＝〔人＋却〕」　上欄に「御イ」（墨筆）とあり。

○戒の勝法（返）无（き）モ［イ、无勝法「モ」］亦復（た）是（の）如（く）して。縱―使（ひ）勤＊行「スレ（とも）」終に增長（せ）不（ス）して（上48、・も・も・‐‐す・（・ゴンギヤウす・）・ず・）

＊「行」　右傍の墨筆仮名「スレ」、続く文字を抹消した跡あり。

○成就（返）を＊求（め）者（ハ）又（た）勝―伴を須（モチ）ヰ（よ）。（上49、・ば・もちゐる・）

＊「求」　同字の上に丸印（朱筆）あり。右傍・上欄に「十」（共に朱筆）とあり。また、上欄の「十」の右側には「第十一文在下巻聖道分」（朱筆）とあり。

○淨潔に端嚴にして族姓の家に生（まれ）法（返）に依（り）て勇健（に）して諸根（返）を調伏して［イ、調伏「シ」］愛―語して捨ヲ樂ヒ［イ、樂（ラ）ヲ愛語（して）・捨して］大慈悲（返）を具「して」能「く」飢渴・及（ひ）諸の苦惱（返）を忍（ひ）餘の天（返）に歸して［イ、歸「シ」］幷に及（ひ）供養セ不（す）。（上50、・‐‐す・（・デウブクす・）・を・ねがふ・ラク・を・（・‐す・）・キす・‐‐す・（・クヤウす・））

○聰明善巧にして常に恩―義（返）を懷（オモ）ヒ三寶の處（返）に於て深心に恭敬（す）。（上52、・おもふ・）

○是（返）（の）如（き）德行アテ・莊嚴（返）を具（する）［イ、具「ニ」莊嚴「セラム」］者（もの）此「ノ」［之］時「返」に於「テ」甚「タ」値遇「シ」難「シ」。（上53、・あり・て・つぶさに・‐‐せる・（・シヤウゴムせる・）・む・この・おいて・はなはだ・‐‐す・（・ヂグす・）・かたし・）

○若（し）善根（返）を具して［イ、具「シ」］德行（返）有（る）者（もの）
應（に）是（返）（の）如（き）伴を求（む）［應］（再讀）（し）
（上54、・ーす・（・グす・））
○＊復（た）次（に）行者・若（し）眞言（返）「ヲ」持誦（し）
速「ニ」成（返）（せむと）欲（は）は［者］［イ、欲（は）者（ハ）］
・應（に）諸佛の曾（ムカシ）所住の處・或（アルイ）—於ハ菩薩・緣覺・聲聞の
所住（の）［之］處に居す［應］（再讀）（し）。（上56、・を・
すみやかなり・ば・むかし・あるいは・）
＊「復」　同字の上に丸印（朱筆）あり。右傍・上欄に「七」（共に朱
筆）とあり。
○是（返）（の）如（き）住處は［イ、住處「ヲハ」］諸の天龍
等・常に供養「シ」及—以（ひ）衞—護「スルコトヲ」爲す（「ス」）。
（上57、・をば・ーーす・（・クヤウす・）・ーーす・（・ヱゴ
す・）・こと・を・なす・）
○是「ノ」故「ニ」・行者身心（返）を淨（く）「して」常に戒
儀（返）「ヲ」具「セムト」欲「ハヽ」常「ニ」應（に）是（返）
（の）如（き）勝處「ニ」居住す［應］（再讀）（し）。（上58、
・この・に・を・ーす・（・グす・）・む・と・おもふ・ば・
つねに・に・）○若（し）是（返）（の）如（き）福地（返）「ニ」遇（ア）
ハ不（れ）「ハ」亦（た）應（に）［於］大河の邊に居止（す）
［應］（再讀）（し）。或（は）小河（返）に近（き）「ニモ」或
（は）陂（ヒ）（平）泊（ハク）（入）に住「せよ」［イ、亦（た）應（に）［於］
大河の邊（に）居止（し）或（は）小河（に）近（きにも）或
（は）陂泊（に）住「す」［應］（再讀）（し）］。（上59、・に・
あふ・ば・に・も・ヒハク・（・ヒバク・））
○名花滋「ト」茂「セルニ」［イ、滋「ク」茂「ク」］。及（ひ）
闐（「火イ」）鬧（「ネウ」）（返）を離「レ」其の＊水清く流「レ」充滿「シ」盈
溢しても諸の水族（の）惡毒虫の无（き）者（もの）。（上61、・と・
ーす・（・モす・）・り・に・しげし・しげし・クワイネウ・
（・ヱネウ・）・はなる・ながる・ーーす・（・シユマンす・））
＊「水」　本行では同字の上の「大」字を抹消符（墨筆）で抹消。
○或（は）山の間の閑靜（なる）［之］處「ノ」・軟草地（返）
に布（き）豐（ゆたカ）ニ花果（返）「ニ」足レルニ［イ、足（れる）
「ナラム」（に）］居（し）或（は）山腹（「フク」）及（ひ）巖窟の中「ノ」
・諸の＊猛畏の毒獸（の）［之］類无（きに）住「せよ」（上
62、・の・ゆたかなり・に・たる・り・に・なり・む・ーフク
・（・センフク・）・の・）
＊「猛」　本行では以降に「足華果或住山腹及巖窟中」という文を続け、
それら全てを抹消符（墨筆）で抹消。
○是（の）如（き）等の處に［イ、處「ヲ」］皆（な）應（に）墾（ハ）
リ掘（ホ）ラム（こと）深（さ）一肘量（に）す［應］（再讀）（し）
［イ、應（に）墾「リ」掘（「ホ」）「ル」［應］（再讀）「シ」　深（さ）
一肘量「ニセヨ」］。（上64、・を・はる・ほる・む・ほる・ほ
る・べし・に・す・）
○所有の荊棘・瓦礫・糠（カウ）（去）骨「ト」毛髮は淨—除「せよ」（上
65、・カウ・（・カウコチ・）・と・）
○＊灰（去）炭（タン）（上）鹹（カム）（平）・及（ひ）—諸の虫の窟（アナ）・乃至（し）
深「平」ク窟（ホ）ルニ。如シ盡（ツク）（返）サ不（す）［イ、盡（さ）不（るか）
如（く）して］者應當（は）（モ）に之（返）を棄（て）て更（に）餘處を
求（む）［應當］（再讀）（し）。（上66、・タン・カム・（・ゲム

・）・あな・ふかし・ほる・に・もし・つくす・）

＊「灰」　同字の右肩に斜線（朱筆）があるが、未詳。

○掘ラ（む）［イ、掘ラム］所（の）［之］處には塡ツルに淨キ土を以（せよ）。（上67、・ほれる・ほる・む・みつ・きよし・）

○其（の）地（の）上（返）（に）於（て）［イ、［於］其「ノ」地「ノ」上「ニ」］精室を建立セヨ。（上68、・その・の・に・‐‐す・（・コンリフす・））

○極て須（く）＊堅（ケン）牢に（す）［須］（再讀）（し）。（上68、・ケン‐なり・（・ケンラウなり・））

＊「堅」　『大蔵経』では「堅」字とする。

○上に妙三昧耶に説（返）（く）所の＊如（く）罪（返）を滅セ令（めむ）「カ」故に應（に）數（しはシ）ハ須（く）入（る）［應］（再讀）（し）。（上68、・‐す・（・メツす・）・が・しばしば・）

＊「如」　同字の上に丸印（朱筆）あり。右傍・上欄に「六」（共に朱筆）とあり。また、上欄の「六」の左側には「二〈如上／下〉」（墨筆）とあり。

○是（返）（の）如く普く福聚の諸の明主の所居の住處の漫荼羅（返）に入（り）已（り）「ナハ」一切「ノ」諸魔・遙に彼の人（返）を見て心に恐怖（返）を懷キ各（の）自（オのつか）（ら）馳―散（す）。（上71、・ぬ・ば・の・いだく・おのづから・）

○數（しはシ）ハ彼の諸の漫荼羅（返）に＊入（るに）由（り）て聖衆「ノ」威力・是の人（返）を加護（する）に諸魔彼（返）を見（る）に身・金剛の若（コト）「く」して。復（た）住處（返）を見（るに）大火聚の如（し）［イ、住處「ハ」大火聚（の）如（く）見（ゆ）］。（上72、・しばしば・の・ごとし・は・）

＊「入」　補入符にて「彼」字の上に補入（墨筆）。

○竝に皆（な）馳散して能（く）害を爲（さ）不（シ）。（上74、・じ・）

○世間の所説・及（ひ）出世間の諸の明主の眞言速に成就「ヲ」得。（上75、・を・）

○若（し）此の大漫荼羅（返）「ニ」入（ら）不（す）慈悲及（ひ）菩提心（返）を具セ不（す）諸佛（返）を敬は不外の餘天（返）を［イ、餘天「ニ」］歸して我「カ」法（返）「ヲ」念持「セム」は即（ち）自（ら）―害（する）なり。（上76、・に・‐す・（・グす・）・に・わが・を・‐‐す・（・ネムヂす・）・む・）

○若（し）念誦の人・遍く諸の漫荼羅に入（るを）辨「セ」不して中（返）に於て隨（ひ）「テ」一ノ三昧耶（返）を辨「して」深心「ニ」恭敬して［イ、恭敬「シ」］亦（た）應當（に）須（く）入（る）［應當］（再讀）（し）（上77、・‐す・（・ベンず・）・て・の・に・‐‐す・（・クキヤウす・））

○譬（は）芽種・地（返）に依（り）て生（返）（すと）雖（も）漑（ソ）キ灌（返）（ソ）クニ［イ、漑（去）灌（するに）］勤（むれ）は乃（ち）滋く茂（返）（ることを）得（るに）＊由（るか）如（し）［イ、勤（め）「テ」漑（き）灌（くに）由（り）乃（ち）滋（シ）茂「スルコトヲ」得（るか）如（し）］（上81、・そそく・そそく・に・カイ‐す・（・カイクワンす・）・て・シ‐す・（・シモす・）・こと・を・）

＊「由」　同字の左傍に、「ヒ」のような符号（墨筆）あり。右傍には「由」字を記す（墨筆）。

○勝法の戒（返）「ニ」依「ルコトモ」亦復（た）是（の）如（し）。（上82、・に・よる・こと・も・）
○慈（返）「ヲ」以（て）漑灌（し）テ善芽（返）「ヲ」令（て）生「セ」［令］（再讀）（む）。（上82、・を・カイ-す・（・カイクワンす・）・て・を・-す・（・シヤウす・））
○世尊の所説の別解脱の法・清淨「ノ」尸羅「ヲ」・具「ニ」應（に）修行「す」［應］（再讀）（し）。（上82、・の・を・つぶさに・）
○若（し）是（れ）俗の流ハ但（た）僧の服「ヲ」除（き）て自餘の律儀をは悉（く）皆（な）應（に）行（す）［應］（再讀）（し）。（上83、・ともがら・は・を・）
○是（返）（の）＊如（く）染法（返）「ヲ」遠離して［イ、遠離「シ」］善根（返）（を）具足「して」教門（返）「ヲ」敷演して眞言（を）持誦（せよ）（上84、・を・-・-す・（・ヲンリす・）・を・）
＊「如」　同字の上に丸印（朱筆）あり。右傍・上欄に「卅四」（共に朱筆）とあり。
○若（し）疲倦（返）「ヲ」＊生「サ」（は）應（に）微妙（の）大乘經典「ヲ」讀（む）［應］（再讀）（し）。（上85、・を・なす・を・）
＊「生」　右傍に「ナサ□」（墨筆）とあり。
○復（た）滅罪（返）「ノ」爲「ニ」常「ニ」空＊閉・及（ひ）清淨「ノ」處（返）（に）於（て）［イ、［於］空閉及（ひ）清淨（の）處「ニシテ」］或（は）香泥（返）「ヲ」以「シ」或（は）復（た）砂ヲ即「して」制多「ヲ」造立（せ）「ヨ」。（上86、・の・に・つねに・の・に・して・を・もてす・いさご・を・を・-・-す・（・ザウリフす・））
＊「閉」　『大蔵経』では「閑」字とする。
○内に縁起法身（の）［之］偈（を）安（せよ）。或（は）舍利及（ひ）尊像の前にして［イ、内（に）縁起法身（の）［之］偈或（は）舍利「ヲ」安（し）及（ひ）尊像（の）前（にして）］花鬘・燒香・塗香・花燈・幢幡蓋等・及（ひ）妙讃嘆（返）「ヲ」以「て」虔（去）心「ニ」供養（せ）「ヨ」。（上87、・を・を・ケン-なり・（・ゲンシムなり・）・-・-す・（・クヤウす・））
○＊常（に）他（返）「ノ」＊爲（に）祭「ルヘシ」。（上90、・の・まつる・べし・）
＊「常」　同字の上に丸印（朱筆）あり。右傍・上欄に「十三」（朱筆）とあり。また、上欄の「十三」の左側には「五〈常爲／下〉」（墨筆）とあり。
＊「爲」　右傍に「ルヘシ」（墨筆）とあるが不審。「祭」字仮名を誤記したか。
○復（た）應（に）火「訓」（返）「ニ」事（へ）「マツリ」及—＊以（ひ）王（に）事「フ」［應］（再讀）（し）［イ、事（へ）「マツルヘシ」］「。」（上90、・に・まつる・つかふ・まつる・べし・）
＊「以」　下欄に「女」らしき文字を記す（墨筆）が、本文との対応関係は未詳。
○亦（た）須（く）妻（返）ヲ娶リ男（返）「ヲ」生「マシメ」種「ヲ」繼「ク」［須］（再讀）（し）。（上91、・め・を・とる

・を・うむ・しむ・を・つぐ・）
○汝此「ノ」法（返）「ヲ」行「して」方に解脱「ヲ」得。（上91、・この・を・を・）
○云何か釋教の眞言「ヲ」持誦（せむ）。（上92、・を・）
○行者若（し）是（れ）・刹利（の）族種（な）ラハ彼此の難を致サム。（上92、・なり・ば・いたす・む・）
○汝「ハ」是「レ」・族姓刹利（の）［之］種なり。（上93、・は・これ・）
○應（に）須（く）祭―祀シ捨施「シ」自學ス［須］（再讀）（し）。（上93、・‐‐‐す・（・サイジす・）・‐‐‐す・（・シヤセす・）・‐‐‐す・（・ジガクす・））
○斯（返）（の）如（き）三法は是「レ」汝か本宗なり。（上94、・これ・）
○復（た）須（く）紹（去）繼（ケイ）（去）して［イ、繼ク］・怨敵「ヲ」摧伏す［須］（再讀）（し）。（上94、・‐ケイす・（・ゼウケす・）・つぐ・を・）
○汝此「ノ」法（返）「ヲ」行「して」方に解脱「ヲ」得（む）。（上94、・この・を・を・）
○行者若（し）是れ毘舍（の）［之］種「ナラハ」（は）彼此「ノ」難「ヲ」致（さむ）。（上95、・なり・ば・この・を・）
○應（に）農田「シ」・及（ひ）雜「―」産「シ」・興―易（ヤク）等の＊務（ツメト）（を）［イ、務（イソキ）「ヲ」］作す［應］（再讀）（し）（上96、・‐‐‐す・（・ノウデンす・）・‐‐‐す・（・ゾフセンす・）・‐ヤク・（・コウヤク・）・つめと・いそぎ・を・）
＊「務」　「ツメト」の仮名は原本（高野山本）のまま。

○汝終に合（に）眞言を持誦「す」［合（ヘ）］（再讀）（から）不（す）。（上97、・べし・）
○行者若（し）是（れ）・首―陁（の）［之］種ナラハ彼此「ノ」難「ヲ」致（さむ）。（上97、・なり・ば・この・を・）
○是（返）（の）如（き）［之］法・汝（返）に在（り）て何ソ＊關（アツカ）ラム。（上99、・なんぞ・あづかる・む・）
＊「關」　右傍に「開」（朱筆）とあり。
○是（返）（の）如（き）等（の）種々ノ諸の難（返）を以（て）行者（返）「ヲ」惱亂して信心「ヲ」退（か）令（む）。（上99、・の・を・を・）
○彼等の外道「ハ」・直タ他（返）「ヲ」損（するのみ）「ニ」非す（上99、・は・ただ・を・に・）
○外道（の）［之］法は午「ノ」時（返）「ヲ」過（き）「テ」食「す」。（上101、・の・を・て・）
○聖道（返）「ヲ」修（する）者は彼（返）與同「セ」不（す）。（上101、・を・‐す・（・ゾウず・））
○是「ノ」故「ニ」應（に）外道「ノ」家（返）「ニ」往（き）「て」［而］乞食「ヲ」行（ふ）［應］（再讀）（から）不（す）。（上102、・この・に・の・に・を・）
○若（し）善惡因果（の）［之］法（返）「ヲ」論（せ）は有＊智「ニマモ」・无智「ニマレ」・婆羅門種「ニマレ」・毘舍「ニマレ」首陁「ニマレ」等（し）「クシテ（して）」差別无（し）。（上103、・を・に・まも・に・まれ・に・まれ・に・まれ・に・まれ・ひとし・して・）
＊「智」　「ニマモ」の仮名は原本（高野山本）のまま。

○良（マコト）ニ世間の妄分別（返）「ニ」由（る）か故「ニ」假に毘舍・及（ひ）婆羅門を立（タ）「チタリ」。（上104、・まことに・に・に・たつ・たり・）
○首陁「ナリトモ」・若（し）能（く）善（返）「ヲ」＊修（せ）は當（に）涅槃「ヲ」證（す）［當］（再讀）（し）。［イ、證「して」］刹利「ナリトモ」・罪（返）「ヲ」造（ら）は悪道「ヲ」免（れ）不。（上105、・なり・とも・を・を・なり・とも・を・を・）
＊「修」　返り点らしき点（墨筆）があるが、未詳。
○＊復（た）次「ニ」衆生「ハ」无―始ヨリ已（コノ）來（カ）タ垢穢（の）［之］身なり（上106、・つぎに・は・より・このかた・）
＊「復」　同字の上に丸印（朱筆）あり。右傍・上欄に「十四」（共に朱筆）とあり。
○食「ノ」淨（返）（なる）に由（ら）不（す）身心（は）淨（なるを）得。（上106、・の・）
○悪業（返）「ヲ」斷除「シ」諸「ノ」善法（返）「ヲ」修「して」方「ニ」身心（の）清淨（を）獲得（す）可（し）。（上107、・を・‐‐す・（・ダンヂヨす・）・の・を・まさに・）
○＊譬（は）人（返）有（り）て身瘡癬（ミ）（サウセン）（平）［イ、癬（ハタケ）］を患「ヘテ」。但（た）除差（サイ）（返）［イ、差（シ）］を念（し）藥（返）「ヲ」以（て）塗（るか）如（く）・［イ、如（し）「。」］（上108、・み・サウセン・（・シヤウセン・）・はたけ・うれふ・て・‐サイす・（・ヂヨシヤす・）・‐シす・（・ヂヨシヤす・）・を・）
＊「譬」　同字の上に丸印（朱筆）あり。右傍・上欄に「十六」（共に朱筆）とあり。また、右傍・上欄の朱筆の「六」字から少しずらして、墨筆にて「七」字を記す。
○寶（丟）［イ、寶（トク）］［イ、寶（トウ）］風「ヲシテ」孔（サ）「―」穴「ヨリ」疎（ス）「キ」［イ、疎（ヲロカ）「ニ」］漏（カセモラ）（さ）使（むる）
＊勿「レ」（上109、・あな・トク・（・ヅ・）・トウ・（・ヅ・）・かぜ・を・して・サ‐・（・クウグヱチ・）・より・すく・をろかなり・（・おろかなり・）・もらす・なかれ・）
＊「勿」　上欄に「四（勿使／下）」（墨筆）とあり。
○＊其の室に門（返）を安（くこと）東西北方「ニセヨ」。（上109、・に・す・）
＊「其」　同字の上に丸印（朱筆）あり。右傍・上欄に「八」（共に朱筆）とあり。
○營（平）「―」造成「リ」已（り）「ナハ」［イ、已（り）「て」］牛糞（エイ）（返）「ヲ」用（て）［於］其の室「ノ」中に塗れ。（上110、・エイ‐・（・ヤウザウ・）・なる・をはる・ぬ・ば・を・の・）
○彼の法事相應（の）［之］方（返）に隨（ひ）「テ」尊像を安置セヨ。（上111、・て・‐‐す・（・アンチす・））
○其の所の尊の「―」容（カタチ）・綵＊畫して＊＝〔阜＋周〕剋（コク）して或（は）以て・鑄（イ）成（ナ）ヌ。（上111、・かたち・‐クワクす・（・サイグワす・）・テウコクす・いる・なる・ぬ・）
＊「畫」　朱筆仮名の上に墨筆にて文字らしきものがあるが、未詳。
＊「＝〔阜＋周〕」　上欄に「琱／□□反／□也」（墨筆）とあり。
○其の所「―」畫「ノヱ」＊楨は應（に）白＝〔疊＋毛〕の細（く）柔（コマヤカ）ニ密（入）緻（丟）のモノヲ用（ゐ）＊近―＊者織の

成（りて）兩の＊頭（に）縷（返）を存す［應］（再讀）（し）［イ、應（に）白＝〔疊＋毛〕「ノ」細「―」柔密「―」緻（のものを）用（ゐる）［應］（再讀）（し）近者織（り）成（し）「て」兩（の）頭「に」縷「ヲ」存（ア）「ラシメヨ」］（上112、・の・ゐ・こまやかなり・もの・を・の・を・あり・しむ・）

＊「楨」　右傍に「□反」（朱筆）とあり。

＊「近」　『大蔵経』では「匠」字とする。右傍に二本線（墨筆）があるが、未詳。

＊「者」　右傍に仮名（朱筆）があると思われるが、虫損により未詳。

＊「頭」　同字から「存」字にかけて右傍に仮名（朱筆）があると思われるが、「ア」の前後の文字は虫損により未詳。

○割（カチ）＊截（セ）（返）（せ）＊令（むる）勿（れ）（上113、・カチセチす・（・カチゼチす・））

＊「截」　右傍に「セ□」（朱筆）とあり。

＊「令」　右傍に仮名（朱筆）があると思われるが、虫損により未詳。

○＊幅（を）闊（ヒロク）セヨ［イ、闊シテ］＊元（モト）未（た）曾（むかシ）ニモ用（返）に經＊［未］（再読）「ラムヲセ（よ）」（上113、・ひろくす・ひろくす・て・もと・むかし・に・も・む・を・す・）

＊「幅」　右傍に仮名（朱筆）があると思われるが、虫損により未詳。

＊「元」　右傍に仮名（朱筆）があると思われるが、虫損により未詳。

＊「未」　右傍に「ラムヲセ□」（墨筆）とあり。

○＊先（つ）・須（く）＊淨「ク」洗（ひ）て・復（た）香水を「もて」灑（く）［須］（再読）（し）。（上114、・きよし・）

＊「先」　「光」字を重書にて訂す（墨筆）。

＊「淨」　補入符にて右傍に補入（墨筆）。

○畫（返）（く）所（の）［イ、所畫「ノ」］綵色には應（に）膠を和（マシ）フ［應］（再読）（から）不（ス）。（上114、・の・まじふ・）

○［於］新（し）キ器に牛「ノ」毛「ヲ」置（き）「て」筆（と）爲（セ）「ヨ」。（上114、・あたらし・の・を・す・）

○其の綵畫の人「ハ」・澡浴清淨に「して」應（に）八戒（返）「ヲ」受（け）て法（返）（の）如（く）之（返）「ヲ」畫（す）［應］（再読）（し）［イ、畫「せよ」］（上115、・は・を・を・）

○其「ノ」像成「リ」已（り）「ナハ（は）」應（に）塗香・燒香・花縵・飲食・燈明を用（て）讃歎して禮拜して廣く供養「シ」已（ヲ）フ［應］（再読）（し）（上116、・その・なる・ぬ・ば・‐‐す・（・クヤウす・）・をふ・）

○然（しかし）て後「ニ」・求（返）（め）し所速「ニ」成就を得。（上117、・に・すみやかなり・）

○＊復（た）次（に）行者・若（し）是（れ）俗人（な）ラハ亦（た）頭（返）「ヲ」剃（り）「テ」唯（た）頂（いたたき）（の）髮を留「メヨ」。（上118、・なり・ば・を・て・いただき・とどむ・）

＊「復」　同字の上に丸印（朱筆）あり。右傍・上欄に「十二」（共に朱筆）とあり。

○所着の衣服を赤土に之「ヲ」染「メヨ」。（上118、・を・そむ・）

○或（は）白色及―以（ひ）草衣を着（けし）「メヨ」。（上119、・しむ・）

○或（は）樹の皮・芻（去）摩（上）の布「―」衣（を）着（けし）メヨ。（上119、・しむ・）

○極て須（く）端圓に・細密「にして」缺（返）「ケタル」无（からし）「メヨ」（上121、・かく・たり・しむ・）
○并に破―漏セ不。（上121、・-・-す・（・ハルす・））
○應（に）此の器（返）を持（ち）乞食を巡行（す）［イ、巡行「して」乞食「ス」］［應］（再讀）（し）。（上121、・スン-す・（・ジユンギヤウす・）・-・-す・（・コツジキす・））
○所居（の）［之］處は其「ノ」村（去）邑（返）「ヲ」去（る）「コト」遠（返）（から）不近（から）不。（上122、・その・スン-・（・ソンオフ・）・を・こと・）
○衆多の人「ヲ」居して・諸の外道（返）无「く」及（ひ）飲食（返）「ニ」豐に「して」常「ニ」惠施（返）（を）樂「フテ」三寶「ヲ」歸信（せよ）。（上122、・を・に・つねに・ねがふ・て・を・）
○然（て）外道「ノ」・我慢に覆（返）＊所豪「―」族（返）「ヲ」倚リ恃ムテ［イ、＊倚「―」恃「シて」］復（た）慈悲（返）无（上）「キヲ」＊破「ス」（上123、・の・に・おほふ・おほふ・る・を・よる・たのむ・て・-・-す・（・イジす・）・なし・を・-す・（・ハす・））
＊「所」　中央に斜線（朱筆）あり。「れ」のヲコト点かとも思われるが、未詳。
＊「倚」　「倚」字と「恃」字の間の合符に、合点らしき符号（墨筆）あり。
＊「破」　同字、翻刻文に反映した以外にも訓読符（墨筆）と「の」のヲコト点（朱筆）があり。更に、右下には墨筆にて「彼」字を記すことから、「彼（訓）の外道」とする読みを想定すべきか。

○或（は）行者の釋「ノ」教の法（返）「ヲ」念誦（する）を見（ニ）已（り）て心「ニ」瞋恚「して」［而］之「ヲ」惱亂す。（上124、・の・を・を・に・を・）
○行者若（し）是（れ）・婆羅門（の）種（な）ラハ彼此「ノ」難「ヲ」致「サム」。（上125、・なり・ば・かれ・この・を・いたす・む・）
○汝應（に）自ラ學（ひ）及―以（ひ）他（返）を教「へ」自（ら）施を受「ケ」自（ら）天神「ヲ」祭し［イ、天神（を）祭（す）］［應］（再讀）（し）。］（上127、・みづから・をしふ・ほどこし・うく・を・）
○＊亦（た）妙花「ヲ」亦（た）得ツ。（上128、・を・つ・）
＊「亦」　同字の上に丸印（朱筆）あり。右傍・上欄に「卅五」（共に朱筆）とあり。また、上欄の「卅五」の左側には「七〈妙花／下〉」（墨筆）とあり。
○爲（返）ハ所ル青蓮・紅蓮花等及（ひ）諸の意樂の種種の雜花なり。（上128、・いはゆる・）
○＊行住坐立・通して念誦を許ス。（上129、・ゆるす・）
＊「行」　同字の上に丸印（朱筆）あり。右傍に「廿二」（朱筆）とあり。
○唯（た）臥の時「ヲハ」除「く」。（上130、・をば・）
○念誦（し）已訖（り）ナハ恆に六念（返）を思（ひ）彼等の種種の功德を觀察セヨ。（上130、・ぬ・ば・-・-す・（・クワンセチす・））
○＊復（た）次（に）貪等の一切「ノ」煩惱・心（返）與相應（する）をは名（け）「テ」生死（と）爲。（上133、・の・て

・）

＊「復」　同字の上に丸印（朱筆）あり。右傍・上欄に「十五」（共に朱筆）とあり。

○煩悩若（し）心（を）除（かは）「・」清浄「返」「ヲ」得（上133、・を・）

○諸（の）佛「・」彼（返）「ヲ」説（き）「テ」名（け）「テ」解脱（と）爲。（上134、・を・て・て・）

○譬（は）淨水必（す）垢穢无（く）して。塵垈（返）（を）以（て）「ノ」故「ニ」水（返）（を）令（て）［イ、［令］水「ヲシテ」］渾濁（返）（なら）［令］（再讀）（むるか）［イ、渾「コン」濁「ナラシムルカ」］如（し）（上134、・の・に・を・して・コン‐なり・（・ゴンダクなり・）・しむ・が・）

○心性「ノ」清淨「ナルコト」（も）亦復（た）是（の）如（し）。（上135、・の・‐‐なり・（・シヤウジヤウなり・）・こと・）

○客煩悩（返）「ヲ」以（て）心（返）「ニ」渾「ソ」「メ」［イ、渾「ケカ」「シ」］濁（ら）令（む）。（上136、・を・に・そむ・けがす・）

○爲（イ）ハク＊縁「｜」活（入）兒子・蓮子・路（去）陁（上）羅「上」〈二／合〉乞「上」沙「上」・〈二／合〉水精・銅・錫（シ〔ニン〕ヤク）・木＊柟（訓）子・瑠璃・金・銀・鐵・貝「ハイ」「なり」・（上137、・いはく・シヤク・シヤク・ハイ・）

＊「縁」　左傍に二本線（朱筆）を記すが、未詳。

＊「柟」　右傍に「槌イ」（墨筆）とあり。

○其「ノ」數百（返）に過「セ」ルニ隨（ひ）「テ」一類（返）「ヲ」取（り）「テ」以（て）數珠（と）爲（せ）。（上138、・その・‐す・（・クワす・）・り・に・て・を・て・）

○虔心に執持して如法に（ニ）念誦「セヨ」。（上139、・に・‐‐す・（・ネムズす・））

○左右「ノ」手「ヲ」以（て）其「ノ」珠（返）「ヲ」執（り）「テ」剋―誦セヨ。（上139、・の・を・その・を・て・‐‐す・（・コクズす・））

○或（は）右「ノ」手（返）「ヲ」用（ゐ）或（は）左「ノ」手「ヲモ」＊應（に）用（ゐる）［應］（再讀）（し）。（上140、・の・を・の・を・も・）

＊「應」　「て」のヲコト点らしき符号（朱筆）があるが、未詳。

○眞言畢（返）（らむと）欲（れは）俱（に）時應＊＝〔爪＋単一ツ〕。（上140、）

＊「＝〔爪＋卑〕」　右傍に仮名（朱筆）があると思われるが、虫損により未詳。

○專心に誦持（せ）は謬（アヤ〔ま〕）（り）「テ」錯「｜」亂「スルコト」勿（し）。（上141、・あやまる・て・‐‐す・（・サクランす・）・こと・）

○心を［於］尊「ニ」・或―於（は）眞言「ニ」・及以（ひ）手印に繫（け）ヨ。（上141、・に・に・かく・）

○諸根（返）を調伏して尊「ノ」前（返）（に）端坐して心散亂（せ）不。（上142、・の・）

○微（オ〔コ〕）シ兩の脣「返」「を」動（し）「て」眞言（を）念持セヨ。（上143、・すこし・‐‐す・（・ネムヂす・））

○此「ノ」心は由シ風「｜」電・獼猴「ノ」若（コト）シ。（上143、・この・なほ・し・の・ごとし・）

○復（た）海波・＊湖（ヨ）浪の搖（れ）動（く）「カ」如（し）。

（上144、・コ‐・（・グラウ・）・が・）

＊「湖」　左傍に「潮イ依之」（墨筆）とあり。

○諂曲自在にして諸の境「ニ」耽着（す）。（上144、・に・）

○是「ノ」故「ニ」應（に）須（く）心（返）を攝（し）「て」散「セ」不[ず]。（上144、・この・に・‐す・（・サンず・））

○眞言（返）「ヲ」＊持誦（する）「ニ」若（し）疲惓（返）「ヲ」生「シ」惛＊尤睡眠「し」て[て]心「をして」散亂（返）（せ）令（めは）應（に）起（ち）て經行「す」［應］（再讀）（し）。（上145、・を・に・を・‐す・（・シヤウず・））

＊「持」　同字の上に丸印（朱筆）あり。右傍・上欄に「廿四」（共に朱筆）とあり。

＊「尤」　右傍に「沈イ依之」（墨筆）とあり。左傍に文字（墨筆）があるが、未詳。

○或（は）四方（返）「ヲ」觀[ミ]或（は）水ヲモテ滲[アラ]「ヒ」灑（き）て醒悟（を）得[エ]令（めよ）。（上146、・を・みる・を・もて・あらふ・う・）

○行者若（し）移動（の）［之］心（返）「ヲ」生「サ」は即（ち）應（に）便（ち）是（返）（の）如（く）對治「ヲ」作（す）［應］（再讀）「シ」。（上147、・を・なす・を・べし・）○是の身「ハ」主无（し）。（上148、・は・）

○業（返）「ニ」由（り）一切「ノ」諸趣（を）流轉「す」・（上148、・に・の・）

○依止「スル」所无（し）。（上148、・‐‐す・（・エシす・））

○此「ノ」身（返）「ヲ」捨「て」後「ニ」復（た）餘「ノ」形「ヲ」受（く）。［イ、受「して」］（上148、・この・を・に・の・を・）

○其「ノ」惡「ノ」［之］業・斯（返）「ニ」因（り）「て」絶（え）不[ず]。（上149、・その・の・に・）

○生老病死・憂悲愁苦・愛別離苦・求不得苦・怨憎會苦・五＊盛蘊苦・所至の方（返）「ニ」隨（ひ）終「ニ」免（るるを）得[エ]不。（上149、・に・つひに・う・）

＊「盛」　「に」のヲコト点らしき符号（朱筆）があるが、未詳。

○蚊＝｛虫[マウ]＋盲｝寒熱・及―以（ひ）飢渴・是（の）＊如（き）等の苦處處に皆（な）有（り）。（上151、・‐マウ・（・モンミヤウ・））

＊「如」　本行では「如」字が重複。

○心轉[ウツリカタト]「返」ラム「ト」欲（れ）は＊方（に）斯（返）「ヲ」以（て）對治（せ）「ヨ」。（上152、・うつりかたどる・む・と・を・‐‐す・（・タイヂす・））

＊「方」　返り点らしき符号（朱筆）があるが、未詳。

○貪若（し）盛（返）（ら）ム（と）欲（れ）は白骨觀を修セヨ［イ、白骨「返」「ヲ」修「して」觀「ヨ」］。（上152、・む・‐す・（・シユす・）・を・みる・）

○＊［之］行者（の）食（返）「ヲ」喫[クラ]ハム（ことも）亦復（た）是（の）如（し）。（上153、・を・くらふ・む・）

＊「之」　同字の上に丸印（朱筆）あり。右傍・上欄に「十七」（共に朱筆）とあり。また、右傍には朱筆の「七」字から少しずらして、墨筆にて「六」字を記す。

○但（た）飢渴（返）「ヲ」除「せよ」（上153、・を・）

○滋[シ]悅「ヲ」＊樂（は）不「レ」。（上154、・シ‐・（・シエチ

・）・を・ず・）

＊「樂」　右傍に仮名（墨筆）があると思われるが、虫損により未詳。

○譬（は）人（返）有（り）「テ」［於］深「平」＊磧（入輕）（二）（返）ニ＊入（るか）如（し）（上154、・て・‐セキ・（・シムシヤク・）・に・）

＊「磧」　左傍に「尺音」（墨筆）とあり。下欄に「磧〈且歴／漱也／水淺口／旦口口〉」（朱筆）とあり。

＊「入」　「人」字を重書にて訂す（墨筆）。

○飢渇に逼（ら）所て［當］（に）兒の宍（返）（を）食（す）［當］（再讀）（か）「ラム」（上154、・べし・む・）

○行者（の）食（返）「ヲ」喫（はむことも）亦復（た）是（の）如（し）（上155、・を・）

○但（た）飢「ノ」病（返）「ヲ」除「せよ」（上155、・の・を・）

○其「ノ」味「ニ」着（する）勿「レ」。（上155、・その・に・なかれ・）

○喩（は）物（返）（を）秤（カ）クルニ［イ、秤「ノ」物］重「返」（き）「に」隨（ひ）頭（ハシ）（は）下リ其「ノ」（ハカリ）物若（し）（も）輕（み）「セ」は便「｜」即（ち）頭（はしアカ）高リ・物若（し）＊均（ヒト）平シケレハ其「ノ」秤（ハカリ）亦（た）平（ヒト）（返）シキカ如（し）（上156、・かく・に・はかり・の・もの・はし・さがる・その・す・あがる・ひとし・ば・その・はかり・ひとし・が・）

＊「均」　＝〔土＋白〕字を重書にて訂す（墨筆）。

○行者（の）食（返）「ヲ」喫（ク）ハムコト亦復（た）是（の）如（し）。（上157、・を・くふ・む・こと・）

○過量「ヲ」得不「レ」。（上158、・を・ず・）

○應（に）極「テ」少く（ある）［應］（再讀）（から）不。（上158、・きはめて・）

○譬（は）朽（ち）タル舍・時に崩（クツ）れ（レ）倒（タフ）（返）レナム（と）欲（れ）は［イ、崩（れ）倒（れなむと）欲（二）（る）時（三）］壞（返）「レ」令（め）不（る）「カ」故「ニ」柱（返）「を」以「て」支（サ）へ持（タモ）ツ「カ」如（く）して［イ、如「シ」］。（上158、・たり・くづる・たふる・なむ・こわる・が・に・ささふ・たもつ・が・ごとし・）

○行者（の）食（返）「ヲ」喫（はむことも）亦復（た）是（の）如（し）。（上159、・を・）

○但（た）身「ヲ」存（する）爲（にして）其「ノ」味「ヲ」貪（る）勿（れ）。（上160、・を・その・を・）

○復（た）車の行（ヤ）ラムトシテ當（に）油（返）「ヲ」以（て）塗（る）「カ」如（し）。（上160、・やる・む・と・す・て・を・が・）

○善（返）「ヲ」增（さむ）「カ」爲（の）故「ニ」應（に）須（く）食「ヲ」喫（ふ）［應］（再讀）（し）。（上160、・を・が・に・を・）

○是「ノ」故「ニ」世尊斯（返）（の）如（き）法「ヲ」説（く）。（上161、・この・に・を・）

○行者身（返）（を）觀（するに）猶（ほ）＊芭蕉（の）若シト。［イ、身「ハ」猶（ほ）芭蕉「返」「ノ」若（しと）觀「して」］喫（返）（ふ）所「ノ」飲食「ニ」其「ノ」味「ヲ」貪（る）勿（れ）。（上162、・ごとし・と・は・の・の・に・その・を・）

＊「芭」　句点らしき符号（朱筆）があるが、不審。下の句点を打ち間違えたか。

○四種「ノ」鉢（返）「ニ」於（て）隨（ひ）て其（の）一（つ）「ヲ」取（れ）。［イ、取（り）「て」］（上163、・の・に・を・）

○前（の）四肘（返）「ヲ」觀（し）「て」巡行「して」乞食（せよ）。（上163、・を・）

○世尊「ノ」所説「なり」。（上164、・の・）

○智惠方便もて六根（返）「ヲ」調伏「して」放逸（せ）令（むる）勿（れ）。（上164、・を・）

○女人ノ令（ヨ）キ色［イ、色（返）を令クシテ］巧（タ）（クミ）ナル笑（わら）（ヒ）・嬌（イツハ）レル［イ、嬌ハメル］言（コトハ）・性（ヒトヨリフコ）矜（ヨリ）ル莊（カサ）（返）ルヲ愛して行歩艶（エム）（去）姿（シ）（平）態（ワサ）男の心（返）「ヲ」動（し）「て」迷「―」惑「シ」醉（スイ）「―」亂（する）コト由（ナホ）シ自性成就の眞言「ノ」如（し）。（上165、・の・よし・よくす・て・たくみなり・わらひ・いつはる・り・こばむ・り・ことば・ひととなり・をごる・（・おごる・）・かざる・を・エムシ・わざ・を・‐‐す・（・マイワクす・）・スイ‐す・（・スイランす・）・こと・なほ・し・の・）

○寧（ろ）＊猛火「返」（返）「ヲ」以（て）燒（き）て鐵の籌（チウ）杖［イ、籌（フクシ）杖］「ヲ」もて捶（クシ）テ雙ツノ目（返）「ヲ」刺（サシ）見（返）（る）所无（から）令（む）トモ亂心（返）「ヲ」以（て）女人ノ種種の相貌美（ヒ）（上）艶を觀視「セ」不ラメ。（上167、・を・チウ‐・（・ヂウヂヤウ・）・ふくし・を・くし・で・ふたつ・の・を・さす・さす・とも・を・の・ビ‐・（・ミエム・）・‐‐す・（・クワンジす・）・ず・む・）

＊「猛」　本行「猶」字の右傍に「猛」字を記す。

○縁（返）「ニ」隨（ひ）乞食（せよ）「。」（上168、・に・）

○＊草及往＊着。（169、）

＊「草」　右傍に「ト」（墨筆）とあるが、未詳。「草」字から「着」字にかけて、『大蔵経』では「莫生住著」とされており、底本とは大きく異同が見られる。

＊「着」　右傍に「ヲ」（墨筆）とあるが、未詳。

○思惟（返）「ヲ」＊正「して」其「ノ」心（返）「ヲ」調伏し牟（ム）尼の行（返）「ヲ」以「て」［而］他舍（に）入「レ」。（上169、・を・その・を・ム‐・（・ムニ・）・を・いる・）

＊「正」　「正」字と「思」字の間に中央の合符（朱筆）があるが、未詳。

○上中下貧賤（の）［之］家「ヲ」擇は不「レ」。（上170、・を・ず・）

○又（た）應（に）新（し）く生（を）産（む）處・及（ひ）衆多の人ノ酒（返）（を）飲（む）［之］處（に）入（る）［應］（再讀）（から）不。（上170、・の・）

○＊姪男姪女「ノ」・放逸（の）［之］處・衆多の小兒「ノ」・戲劇（キヤク）（の）［之］處ニ（ニ）婚禮「訓」（返）ニ於テ（テ）スル處惡（し）「キ」狗（返）有（る）處・衆多の人ノ論し聚會セラム［之］處・及以（ひ）戲―兒の音樂（返）「ヲ」作（コ）サム處・上（返）（の）如（き）［之］處「ニ」皆（な）應（に）往（く）［應］（再讀）（から）不（す）。（上171、・の・の・‐ギヤク・（・ケギヤク・）・に・に・に・おいて・す・あし・の・‐‐す・（・ズヱす・）・り・む・を・こす・む・に・）

＊「姪」　「姪男」の二字、補入符にて下欄に補入（墨筆）。
○食（返）「ヲ」乞（ひ）―得（エ）已（り）テハ即（ち）本處（返）「ニ」還（り）「て」水（返）（を）以（て）足「ヲ」洗（え）。（上174、・を・う・て・は・に・を・）
○食（返）「ヲ」分（ち）「テ」三分（返）（と）爲（せ）。［イ、爲（ナ）「シ」］（上174、・を・て・なす・）
○一分「ヲハ」本尊「ニ」供養「シ」。＊一分をは无「―」導に通し［イ、通「シテ」］。一分「ヲハ」自「ラ」食（せ）「ヨ」。（上174、・をば・に・‐‐す・（・クヤウす・）・‐す・（・ツウず・）・をば・みづから・‐す・（・ジキす・））
＊「一」　175行と176行目の行間に、「四本云施无导　三本云一通无导一分ヨ食餘（転倒符（墨筆）あり）者ナリ水陸過去七代父母及餓鬼」（墨筆）と記す。
○時（返）（に）依（り）「て」［而］食（せ）「ヨ」。（上175、・‐す・（・ジキす・））
○日（に）三（たび）澡浴「セヨ」（上176、・‐‐す・（・サウヨクす・））
＊「日」　同字の上に丸印（朱筆）あり。右傍・上欄に「廿九」（共に朱筆）とあり。
○＊復（た）花・香・塗香（返）を獻（し）・讃嘆（せ）ヨ［イ、花香塗香讃嘆「ヲ」獻（せよ）］。（上176、・‐‐す・（・サンタンす・）・を・）
＊「復」　同字の上に丸印（朱筆）あり。右傍に「廿六」（朱筆）とあり。
○三時「ヲ」闕（く）莫（れ）。（上176、・を・）
○供養（返）（する）所の食「ハ」應（に）雑穢「ニ」（す）［應］（再讀）（から）不。（上176、・は・‐‐なり・（・ゾフヱなり・））
○＊念誦（の）［之］時「ニハ」應（に）茅草「ニ」坐「す」［應］（再讀）（し）。（上177、・に・は・に・）
＊「念」　同字の上に丸印（朱筆）あり。右傍・上欄に「廿」（共に朱筆）とあり。
○心ノ＊若（く）して・諸の供養（の）物（返）（を）辨（せ）不（れは）［イ、若（し）心「ニ」辨（返）「セ」不（る）諸（の）供養「ノ」物「ハ」］俱（に）＊不―共（返）を奉（り）テ住せ（よ）［イ、俱（に）奉（る）も共「ニ」住「セ」不「レ」］。（上177、・の・に・‐す・（・ベンず・）・の・は・て・ともに・‐す・（・ヂユウす・）・ず・）
＊「若」　同字の上に丸印（朱筆）あり。右傍・上欄に「廿七」（共に朱筆）とあり。
＊「不」　上欄に「九〈不共／下〉」（墨筆）とあり。
○＊行者若（し）不善「ノ」思惟「セハ」（は）速「ニ」應（に）遠＊離（す）［應］（再讀）（し）（上178、・の・‐‐す・（・シユイす・）・ば・すみやかなり・）
＊「行」　同字の上に丸印（朱筆）あり。右傍に「卅」（朱筆）、左傍に「卅一イ」（朱筆）、上欄に「卅一」（朱筆）とあり。
＊「離」　同字、本行にはなし。「遠」字の下、下欄に墨筆にて記す。
○亦復（た）是（の）如（き）乃至（し）一念の［イ、一念「モ」］心「ニ」在（ら）使（むる）勿（れ）。（上179、・も・に・）
○譬（は）室内に＊然（トモ）スニ燈燭を＊已（するか）如（く）して［イ、如「シ」］。（上179、・ともす・に・ごとし・）

＊「然」　『大蔵経』では「燃」字とする。
＊「已」　左傍に「以也」（朱筆）とあり。
○風（返）（を）＊防（フセ）（くを）＊爲（す）「カ」故（に）燈焰・轉（イヨ（い））（よ）明（あきら）カ）（なり）。（上180、・ふせく・が・いよいよ・あきらかなり・）
＊「防」　補入符にて右傍に補入（墨筆）。
＊「爲」　本行「依也」。二字の上に「爲」字を重ね書き（朱筆）した上で、右傍に「依也」（朱筆）と記す。
○眞言（返）「ヲ」持誦「して」復（た）勤勇（返）「ヲ」加（ふ）レハ善法增長（する）こと＊生住復（た）是（の）如（し）。（上180、・を・を・くはふ・ば・）
＊「生」　「生住」二字、『大蔵経』にはなし。
○＊復（た）次（に）行者・當（に）威儀「ヲ」具（す）［當］（再讀）（し）。（上182、・を・）
＊「復」　同字の上に丸印（朱筆）あり。右傍・上欄に「卅二」（共に朱筆）とあり。
○手（返）「ヲ」拍（ち）「テ」音樂し（シ）哥舞（上）し（シ）婚（し）＊博（ハク）（入）戲し及（ひ）往（き）て觀看（ミ）ル［イ、觀「｜」看（する）］（を）得（エ）不（シ）・（上182、・を・て・‐‐‐す・（・オムガクす・）・‐‐‐す・（・カムす・）・ハク‐す・（・ハクケす・）・みる・う・じ・）
＊「博」　本行上欄に「祀」（朱筆）とあるが、未詳。
○亦（た）在家出家「ヲ」＊毀謗（せ）不。（上183、・を・）
＊「毀」　「せ」のヲコト点らしき符号（朱筆）があるが、不審。
○及（ひ）＊慢過慢＊相「｜」叉＊期「｜」剋・及以（ひ）諂曲「シ」・非｜時の［イ、非時「ニ」］睡眠「シ」・无義の［イ、无義「ニ」］談｜論して文章及（ひ）諸の邪法（返）「ヲ」尋（タ）ッ「ネ」學「ヒ」瞋恚「シ」・忿恨「シ」・慳貪「シ」嬌慢「シ」放逸「シ」懈怠（する）は皆（な）須（く）遠離（す）［須］（再讀）（し）。（上183、・‐‐‐す・（・エウコクす・）・に・‐‐‐す・（・ズイメンす・）・に・を・たづぬ・まなぶ・‐‐‐す・（・シンイす・）・‐‐‐す・（・フンゴンす・）・‐‐‐す・（・ケントムす・）・‐‐‐す・（・ケウメンす・）・‐‐‐す・（・ハウイチす・））
＊「慢」　本行では同字の下に「婚禮」の二字あり。「婚」字の右傍と左傍には、抹消符かと思われる丸印（墨筆）あり。「禮」字には二本線（朱筆）で抹消した跡あり。
＊「相」　以下「相叉期剋」の左傍に、「タカヘシヲシ」（朱筆）「スマヒトリ」（朱筆）という付訓がなされているが、本行の単語との対応関係は未詳。
＊「期」　右傍に「相イ」（墨筆）とあり。
○亦（た）酒（返）（を）飲（み）及｜以（ひ）肉「ヲ」食（は）不。（上186、・を・）
○＊葱（ソウ）（平）蒜（サン）（去）［イ、蒜］韮（ヒ）（去）［イ、韮］薤（カク）（入）［イ、薤］胡（平）麻（平）・蘿蔔（ラフクヒル）（入）［イ、蘿蔔］及（ひ）野（上）の蒜（アヒル）（去）・歩（サ）「ホ」「去」底（テイ）「上」那〈唐云驢（アラ、キ）（平）／駒（平）蹄（去）〉胡（平）麻（平）油（アフラ）＊滓（カス）「去」［イ、滓（シン）］等竝「ニ」應（に）食（ふ）［應］（再讀）（から）不（ス）。（上186、・ソウ・（・ス・）・サン・ひる・ヒ・（・ク・）・にら・カク・（・ゲ・）・あさつき・あさ・ラフク・（・ラボク・）・あららぎ・ひる・ホテ

イ‐・（・ブタイナ・）・‐‐テイ・（・ロクダイ・）・あぶら・かす・シン・（・シ・）・ならびに・）

＊「葱」　左上に斜線（朱筆）があるが、未詳。

＊「滓」　左傍に「シ（朱筆）音（墨筆）」とあり。

○亦（た）一切の殘食「ヲ」喫（ふ）コト得不。（上188、・を・こと・）

○鬼神（返）を祭（る）食・幷「ニ」供養の食・上「ノ」如（き）［之］殘食皆（な）應（に）食（ふ）［應］（再讀）（から）不。（上188、・ならびに・の・）

○＊復（た）次（に）行者以て持誦（返）を勤（め）て［イ、勤（めて）持誦「して」］應（に）晝―夜を度（ハカ）（る）［應］（再讀）（し）。（上189、・はかる・）

＊「復」　同字の上に丸印（朱筆）あり。右傍・上欄に「廿一」（共に朱筆）とあり。

○念誦畢已（り）「テハ」應（に）法（返）「ノ」如「ク」發遣「ス」［應］（再讀）（し）。（上190、・て・は・の・ごとし・‐‐す・（・ホツケンす・））

○敷「クニ」茅草（返）「ヲ」以「して」彼（返）「ニ」於（て）［而］臥（せよ）。（上190、・しく・に・を・に・）

○睡（返）（らむと）欲（る）［之］時「ニ」先（つ）慈悲喜捨（の）［之］觀「ヲ」作（せ）。（上191、・に・を・）

○幷（に）三寶及（ひ）舍利塔（返）「ニ」於（て）深心に恭敬「セヨ」。（上192、・に・‐‐す・（・クキヤウす・））

○斯（返）「ノ」如（き）「ノ」法（返）「ヲ」以（て）當（に）諸「ノ」罪「ヲ」滅「ス」［當］（再讀）（し）。（上192、・の・の・を・の・を・‐‐す・（・メツす・））

○＊復（た）次（に）行者＊三白食・或（は）菜根・菓・乳・酪・＊及（ひ）蘇・大麥・麺・餅・油＊＝〔宀＋口（カス）＋手〕［イ、＝〔宀＋口＋手〕］・酪・醬（正）（平）相（ひ）和（す）ラム［之］食・種＊種（シ）（の）糜（平）粥を服せよ［イ、三「―」白「―」食「ヲ」（を）服「セヨ」　或（は）菜根菓乳酪及（ひ）蘇大麥麺（ムキノコ）餅油＝〔宀＋口＋手〕「訓」酪醬　相（ひ）和（すらむ）［之］食種種「ノ」糜（ヒ）粥］。（上193、・かす・シ・シヤウ・（・サウ・）・らむ・を・‐‐す・（・ブクす・）・むぎのこ・つくりみづ・の・ビ‐‐（・ミシユク・））

＊「復」　同字の上に丸印（朱筆）あり。右傍・上欄に「十八」（共に朱筆）とあり。

＊「三」　「三白」の二字、補入符にて右傍に補入（墨筆）。

＊「及」　下方に線（朱筆）があるが、未詳。

＊「＝〔宀＋口＋手〕」　上欄に「滓（カス）イ」（墨筆）とあり。

＊「種」　補入符にて右傍に補入（墨筆）。

○若（し）龍鬼藥叉・起―屍の（ノ）法「―」等（返）（を）成就「セムト（と）」欲（は）は修羅宮（返）（に）入（れ）［イ、入「―」修羅宮「ノ」］猛利の成就「す」（上195、・の・‐‐す・（・ジヤウジユす・）・む・と・の・）

○應（に）麻（平）滓（サイ）（の）＊和（する）ニ酪の醬（平）を以（せるを）食「す」［應］（再讀）（し）。（上196、・‐サイ・（・メシ・）・に・）

＊「和」　左傍に仮名（朱筆）があると思われるが、虫損により未詳。

○＊我今當（に）拔折羅法「ヲ」説（く）［當］（再讀）（し）。

（上198、・を・）
＊「我」　同字の上に丸印（朱筆）あり。右傍・上欄に「卅六」（共に朱筆）とあり。
○念誦（の）［之］者常（に）應（に）受＊持（する）［應］（再讀）（し）。（上198、）
＊「持」　右傍に「カ」（墨筆）とあるが、未詳。
○量「ノ」長「ハ」八指・＊或（は）十指・或（は）十二指・或（は）十六指「ニセヨ」・（上199、・の・は・に・す・）
＊「或」　「或十指」は墨筆にて右傍に補入。
○其「ノ」＊量最極は［イ、最極「ノ」］長「ハ」二十指・（上199、・その・の・は・）
＊「量」　補入符にて右傍に補入（墨筆）。
○若（し）大貴・自在（返）（を）成就（し）及（ひ）持明「ノ」悉地（返）「ヲ」求（め）「ムト」欲（は）者即（ち）應（に）金（返）「ヲ」用「テ」拔折羅「ニ」作（る）［應］（再読）（し）。（上200、・の・を・む・と・を・もて・に・）
○瞋「ノ」火若（し）盛「ラハ」慈悲「ノ」觀「ヲ」作「セ」。（上201、・の・さかる・ば・の・を・なす・）
○无明若（し）盛（ら）は縁起「ノ」觀「ヲ」作「セ」。（上202、・の・を・なす・）
○有（る）時「ニハ」怨家翻（カヘ）テ親友（返）「ト」爲（ナ）「リ」有（る）時（に）は親友翻して怨家（返）「ト」爲（る）（上202、・に・は・かへる・て・と・なる・と・）
○復（た）變して以（て）怨親（と）爲（る）等（の）者復（た）變異の家（返）「ニ」歴して此の親友皆（な）不定の相（返）「なり」（と）知れ（上203、・に・）
○智者（は）應（に）妄（みだ）リニ戀＊着（を）起「ス」［應］（再読）（から）不。（上205、・みだりに・おこす・）
＊「着」　左傍に「十二」（朱筆）とあり。
○＊中間に［イ、中間「ノ」］心「ヲ」（もて）［イ、心「ニ」］親友（返）に往（かむ）「ト」欲「ハム」＊時「ニハ」・斯「ノ」法門（返）「ヲ」＊以「テ」應（に）須（く）對＊治「ス」［應］（再讀）（し）。（上205、・の・を・に・と・おもふ・む・に・は・この・を・もて・‐‐す・（・タイヂす・））
＊「中」　左傍に「五」（朱筆）とあり。
＊「時」　左傍に「六」（朱筆）とあり。
＊「以」　左傍に「九」（朱筆）とあり。
＊「治」　左傍に「十」（朱筆）とあり。
○念誦（返）（せむと）＊欲（はむ）時及（ひ）持誦の＊後に＊常（に）應（に）外道・婆羅門・刹利・毘舍・首陁・及―與（ひ）黄（平）門（平）の童男童女等「一」（返）與「二」共（に）相（ひ）談「去」論「上」「三」「ス」［應］（再読）「四」（から）不「五」。（上206、・あひ‐‐す・（・あひダムロンす・））
＊「欲」　同字の上に丸印（朱筆）あり。右傍・上欄に「廿三」（共に朱筆）とあり。
＊「後」　左傍に「三」（朱筆）とあり。
＊「常」　左傍に「十三」（朱筆）とあり。
○法事［而］畢已（り）て若（し）語（返）（らむと）欲（はむ）時「ニハ」應（に）伴侶（返）（と）共「ニ」善法「ヲ」論談「す」［應］（再読）（し）（上208、・に・は・とも・に・を

・）
○涕（テイ）（平）＝〔水＋垂（タ）〕（平）（返）「ヲ」＊棄（て）已（り）「テハ」便（ち）應（に）澡（平）灑（去）「す」［應］（再読）し。（上209、・テイダ・を・て・は・）
＊「棄」　同字の上に丸印（朱筆）あり。右傍・上欄に「卅」（共に朱筆）とあり。
○若（し）便―易（平）已（ら）は竝「ニ」須（く）滲（シム）（平）浴「す」［須］（再読）（し）。（上209、・-イ・（・ベンイ・）・ならびに・シム-す・（・シムヨクす・））
○獻（する）＊所（の）香花・然燈・讃嘆・持戒・精勤・及―以（ひ）念誦・所生の功德「ヲハ」・皆（な）應（に）无上菩提「ニ」迴向「す」［應］（再読）（し）。（上210、・をば・に・）
＊「所」　同字の上に丸印（朱筆）あり。右傍・上欄に「廿八」（共に朱筆）とあり。
○譬（は）衆「ノ」流の大海（返）（に）歸趣「す」　彼「ノ」海（返）「ニ」入（り）已（れ）は便（ち）一味（返）「ト」爲（る）「カ」如「シ」「。」（上211、・の・かの・に・と・が・ごとし・）
○菩提（返）「ニ」迴向（することも）亦復（た）是（の）如（し）。（上212、・に・）
○一切＊令集して共「ニ」佛果「ヲ」成「す」。（上213、・ともに・を・）
＊「令」　『大蔵経』では「合」字とする。
○譬（は）人（返）有（り）「て」稻穀（返）を耕（タカヘ）シ種ヘム（に）［イ、耕（カウ）種「スルニ」］唯（た）子―實（ミ）（返）ヲ求（め）「テ」藁（カウ）（去）幹（カン）（上）［イ、藁幹］ヲ望（ま）不「。」子―實（ミ）成熟し［イ、成熟「して」］収メ獲（ワラカラガ）リ［イ、獲（入輕）「ヲ」収（め）］「・」刈（カ）ルコト已（れ）は［イ、已「スレハ」］藁（カウ）幹（は）求（返）（め）不（して）［而］自然「ニ」得（る）「カ」如「シ」。（上213、・たがへす・うふ・（・うう・）・む・カウ-す・（・キヤウシユす・）・に・み・を・て・カウカン・わらから・を・み・おさむ・かる・を・かる・こと・すでにす・ば・カウ-・（・カウカン・）・-・に・（・ジネンに・）・が・ごとし・）
○是（返）（の）如（き）＊行者菩提（返）（を）獲功德（の）子（タネ）（返）ヲ種（ゑむと）［イ、菩提「ノ」種「―」功德「ノ」子（を）獲（むと）］欲（はは）世「ノ」樂「ヲ」爲（さ）不「レ」。（上215、・たね・を・の・の・の・を・ず・）
＊「行」　本行では「者」字の下に記したものを、転倒符で訂す（墨筆）。
○无上菩提をは以（て）「・」其「ノ」實「ニ」喩（ふ）。（上216、・その・に・）
○諸餘「ノ」世の樂をは將に草幹の（ノ）求（返）（め）不（る）「ニ」自（ら）獲（るに）比「す」。（上216、・の・の・に・）
○若（し）復（た）人（返）有（り）「テ」小利（返）「ヲ」求（めむ）「カ」爲「ニ」［於］行人（返）「ヲ」請（ふも）應（に）彼（返）「カ」爲「ニ」［而］本願（返）「ヲ」退「す」［應］（再讀）（から）不（上217、・て・を・が・に・を・が・に・を・）
○我「カ」長壽（の）［之］身（返）「ヲ」獲得して及（ひ）種種の諸餘の資具（返）（を）獲「て」厭（ア）（返）クコト无（き）［イ、无「―」厭］心（返）（を）以（て）當（に）衆生（返）「を」利（し）所求の種種（の）［之］願「を」滿足（せしむ）［當］（再讀）

（きを）＊待「テ」。（上219、・わが・を・あく・こと・まつ・）
＊「待」　「持」字を重書にて訂す（墨筆）。
○＊復（た）次（に）世間「ノ」八法「を」遠離せよ。（上221、・の・）
＊「復」　同字の上に丸印（朱筆）あり。右傍・上欄に「卅三」（共に朱筆）とあり。
○爲（イ）（返）ハ所（ユ）ル善稱と・惡名と・及―以（ひ）苦樂と得利と失利と毀謗と讃譽なり。（上221、・いはゆる・）
○此の世の八法を當「ニ」遠離（す）應（し）。（上222、・まさに・）
○能（く）一切の不善「ノ」法（返）「ヲ」生（するか）故（に）。（上222、・の・を・）
○譬（は）大海の如（く）死屍（返）（を）宿（ヤト）ラ不して及（ひ）刹那に終（つヒ）ニ［イ、終リニ］［イ、大海（の）死屍「ヲ」宿（し）及（ひ）刹那（に）終「上」（へ）不「中」（る）「カ」如「下」（し）］（上223、・やどる・つひに・をはり・に・を・が・）
○＊折＊羅［而］念誦（返）「ヲ」作（さ）は終「ニ」一切の法事「ヲ」成就（せ）不（し）［イ、不（す）］。（上223、・を・つひに・を・）
＊「折」　本行では「羅」字の下に記したものを、転倒符で訂す（朱筆）。
＊「羅」　同字の上に丸印（朱筆）あり。右傍・上欄に「卅八」（共に朱筆）とあり。また、上欄の「卅八」の左側には「十一（折羅／下）」（墨筆）とあり。
○若（し）辨（返）（せ）不（す）者（ハ）彼然モ一―心を事トシテ念誦（するか）＊如（し）。（上224、・は・しかも・こととす・て・）
＊「如」　返り点らしき符号（朱筆）があるが、未詳。
○＊爲（返）（は）所（る）一「ハ」雌（平）黄・二「ハ」牛黄・三（は）安（去）善（上）那（上）・四（は）朱砂　五（は）吐（去）他（上）香・「・」雄（去）黄（上）・「・」拔折羅・「・」牛蘇・「・」菖蒲・「・」光明朱・「・」鎖（サ）（上）―＊子甲衣・「・」端（チフ）繫（入）［イ、繫（シフ）］布裳・「・」一鉢の叉（ヒシ）・「・」鹿（ロク）（入）皮（ヒ）・「・」横（平）刀（去）・「・」羂＊索鐵鎧（去）「・」「・」三鉢の叉・「・」（上225、・は・は・サ‐・（・サシ・）・‐チフ・（・タンチフ・）・‐シフ・（・タンチフ・）・ひし・ロクビ・）
＊「爲」　上欄に「碓イ」（墨筆）とあるが、未詳。
＊「子」　読点（朱筆）を擦り消した跡あり。
＊「索」　読点（朱筆）を擦り消した跡あり。
○上「ノ」如（き）所説「ノ」成就（の）［之］物・皆（な）三種の成就「ヲ」具足（する）こと＊有（り）。（上228、・の・の・を・）
＊「有」　同字の下、文脈上不審な位置に読点らしき符号（朱筆）あり。
○假―使（ひ）餘の眞言法「ノ」中「ノ」説（返）（く）所（の）［イ、所説「ノ」］諸（の）物・皆（な）此「ノ」三種の成就「ヲ」離（れ）不（す）。（上229、・の・の・の・この・を・）
○＊復（た）次（に）世間「ニ」諸の障難「ノ」毘那耶迦有（り）。（上230、・に・の・）
＊「復」　同字の上に丸印（朱筆）あり。右傍・上欄に「四十」（共に朱筆）とあり。
○過（トカ）（返）「ヲ」覓（モト）ムルカ爲「ノ」故（に）念誦の人「ニ」＊逐（シタ）（か）（ふ）。（上231、・とが・を・もとむ・が・の・に・したがふ・）

＊「逐」　右傍に「シタ口」（朱筆）とあり。
○何等「ヲカ」四（と）爲（す）。（上232、・を・か・）
○此「ノ」四部（返）從（り）无量「ノ」毘那夜迦「ヲ」流出「す」。（上233、・この・の・を・）
○摧壞部の主をは名（け）て无憂大將「ト」曰「フ」。（上234、・と・いふ・）
○其「ノ」部「ノ」中「ニ」七阿僧祇（返）＊有（り）（上234、・その・の・に・）
＊「有」　左下に曲線（墨筆）があるが、墨汚れか。
○護世（の）四王の所説の眞言を持誦（する）者（返）有（らは）［イ、持誦「スルコト」有「ル」者（もノ）「ヲ」］彼（かレ）障難「ヲ」作「ス」。（上235、・‐‐す・（・ヂズす・）・こと・あり・もの・を・かれ・を・なす・）
○野干部の主をは名（け）「テ」象頭「ト」曰「フ」。（上236、・て・と・いふ・）
○其「ノ」部「ノ」中（返）「ニ」於（て）復（た）十八俱胝（の）眷屬有（り）。（上236、・その・の・に・）
○摩醯首羅の所説「ノ」眞言を「・」持誦（する）者（返）有（らは）［イ、持誦「スルコト」有（ア）「ル」者（もノ）「ニ」］彼障＊難（を）作（す）。（上237、・の・‐‐す・（・ヂズす・）・こと・あり・もの・に・）
＊「難」　右傍に「ノ」（墨筆）とあるが、未詳。
○一牙部の主「ハ」名（けて）嚴髻「ト」曰「フ」。（上238、・は・と・いふ・）
○其「ノ」部「ニ」亦（た）一百＊三十俱胝の眷屬有（り）。（上238、・その・に・）
＊「三」　同字から「眷」字にかけて右傍に注記（墨筆）があると思われるが、虫損により「三本」以降の文は未詳。
○大梵天王・及（ひ）憍尸迦・日月天子・那羅延神風神等の所説の眞言を持誦（する）者（返）有（らは）［イ、持誦「スルコト」有「ル」者（もノ）「ニ」］彼障難「ヲ」作「す」。（上239、・‐‐す・（・ヂズす・）・こと・あり・もの・に・を・）
○龍象部の主をは名（けて）頂―行「ト」曰（ふ）。（上341、・と・）
○其「ノ」部「ノ」中（返）「ニ」於（て）一俱胝那臾多一千ノ波頭摩（返）有（る）を以（て）・眷屬「ト」爲。（上341、・その・の・に・の・と・）
○釋教の所説の諸（の）妙眞言を持誦（する）者（返）有（らは）［イ、持誦「返」「スルコト」有（る）者「ニ」］彼障難（を）作「す」。（上242、・‐‐す・（・ヂズす・）・こと・に・）
○又（た）訶（去）利（上）帝（上）の兒（ノ）を（ヲ）名（けて）愛子「ト」曰（ふ）。（上243、・の・こ・を・と・）
○般（ハ）（去）指（シ）（上）迦將の所説の眞言ニヲイテ［イ、眞言「ニ」］彼障難「ヲ」作（す）。（上244、・ハシ‐‐・（・バンシキヤサウ・）・に・をいて・（・おいて・）・に・を・）
○又（た）摩尼賢將の兒「ヲ」名（けて）滿賢（去）「ト」曰（ふ）。（上244、・を・と・）
○＊摩尼部の所＊説の眞言（返）「ニ」於（て）持誦（する）者（返）有（らは）彼の子滿賢［而］障難「ヲ」作（す）。（上245、・に・を・）

＊「摩」　「摩イ」、補入符にて右傍に補入（墨筆）。
＊「説」　補入符にて右傍に補入（墨筆）。
○是（返）（の）如（き）諸の類（の）毘那夜迦各（の）本部（返）「ニ」於（て）［而］障難「ヲ」作（す）。［イ、作（し）「テ」］行者（を）して成就（を）得令（むるを）樂「ハ」不（す）。（上246、・に・を・て・ねがふ・）
○自（ら）變化して本眞言（の）［之］主（返）「ト」作（り）て行者（返）「ヲ」成就「シ」供養（返）「ヲ」受（く）（上247、・と・を・‐‐す・（・ジヤウジュす・）・を・）
○時に明主來（り）て是（返）「ヲ」見已（り）本宮「ニ」却「カヘ」「リ」還「ス」。（上248、・を・に・かへる・‐す・（・グヱンす・））
○富貴（返）「ヲ」＊求（め）は純に銀（返）「ヲ」用「テ」作「レ」。（上249、・を・を・もて・つくる・）
＊「求」　同字の上に丸印（朱筆）あり。右傍・上欄に「卅七」（共に朱筆）とあり。また、上欄の「卅七」の左側には「十〈求富／下〉」（墨筆）とあり。
○海「―」龍王の法（返）「ヲ」成就（せむには）熟―銅（返）「ヲ」以「テ」作「レ」。（上249、・を・を・もて・つくる・）
○修羅宮（返）「ニ」入（ら）ハ［イ、入「ラムニハ」］妙石（返）「ヲ」用（て）作「レ」。（上250、・に・ば・いる・む・に・は・を・つくる・）
○通して一切「ノ」法（返）「ヲ」成就（せむ）「ト」欲（は）は金＊銅銀（返）（を）＊以（て）相「ヒ」和して［而］作「レ」。（上250、・の・を・と・あひ‐す・（・あひワす・）・つくる・）
＊「銅」　本行では「銀」字の下に記したものを、転倒符で訂す（墨筆）。
＊「以」　右傍に「ノ」（墨筆）とあるが、未詳。
○若（し）藥叉「ノ」衆（返）「ヲ」摧（く）コトヲ成就（せむ）「ト」欲（はは）應（に）鐵（返）「ヲ」以「テ」作「ル」［應］（再讀）「シ」。（上251、・の・を・こと・を・と・を・もて・つくる・べし・）
○无病「ヲ」得「エ」及（ひ）錢（去）財（上）（返）「ヲ」求「メムト」欲（はむ）「カ」爲「ニハ」＊失（上）利（上）般尼木・或（は）＊密（去）魯（上）婆（上）木「ヲ」（以て）・［而］金剛「ヲ」作「レ」。（上251、・を・う・を・もとむ・む・と・が・に・は・シ‐‐‐‐‐・（・シチリバンニモク・）・を・を・つくる・）
＊「失」　同字の上に一字あると思われるが、虫損により未詳。『大蔵経』では「以」字とする。
＊「密」　右傍に「一字頂輪云檜木也紫黄云々」（朱筆）とあり。
○一切の鬼魅の所「―」着（返）「ヲ」＊療「セムト」欲（はは）却達（上）羅木（返）（を）用「て」拔折羅「ニ」作「レ」。（上253、・を・‐す・（・レウす・）・む・と・キヤ‐‐‐‐・（・カクダチラモク・）・に・つくる・）
＊「療」　左下に朱のシミのようなものあるが、汚れか。
○若（し）藥叉女（返）「ヲ」成就（せむ）「ト」欲（は）者摩（去）度（上）迦（上）木（返）「ヲ」用「テ」［而］拔折羅「ニ」作「レ」。（上254、・を・と・を・もて・に・つくる・）
○滅罪（返）「ヲ」求（めむ）「ト」欲（は）は阿（去）説「エチ」（入）他「ヲモテ」拔折羅「ニ」作「レ」。（上255、・を・と・‐エチ‐・（・アエチタ・）・を・もて・に・つくる・）

○＊若（し）諸の怨敵（返）「ヲ」摧伏（せむ）と欲（は）者＊害「―」人木（返）「ヲ」用「テ」[而]拔折羅「ニ」作「レ」。（上255、・を・を・もて・に・つくる・）

＊「若」　本行では「若」字が重複。

＊「害」　「害」字の上、「若イ」を補入符にて右傍に補入（墨筆）するも、未詳。

○極悪「ノ」怨敵（の）[之]者（返）を害（せ）ムト欲（はは）[イ、怨敵（返）「ヲ」害（せむと）欲（ふ）[之]者]人「ノ」骨（返）「ヲ」用「テ」拔折羅「ニ」作「レ」。（上256、・の・む・と・を・の・を・もて・に・つくる・）

○幻化（返）「ヲ」成（せむと）欲（は）は水精（返）「ヲ」用（て）作「レ」。（上257、・を・を・つくる・）

○若（し）人（返）（を）令（て）[イ、[令]人「ヲシテ」]極て相（ひ）憎（返）マ[令]（再讀）（めむと）欲（は）者苦練木（返）「ヲ」用（て）拔折羅「ニ」作「レ」。（上258、・を・して・そねむ・を・に・つくる・）

○鬼類（返）「ヲ」＊成就して[イ、成就「シ」]及（ひ）人（返）（を）令（て）[イ、[令]人「ヲシテ」]枯（去）瘁（平）[イ、瘁（ヨウ）]鬪諍等（返）（せ）[令]（再讀）（めむには）[イ、枯瘁鬪諍（せ）[令]（再讀）（めむ）等「ニハ」]而（しこう）て毘（去）梨（上）勒（ロ）（上）木（返）（を）用（て）拔折羅「ニ」作（れ）。（上259、・を・――す・（・ジヤウジユす・）・を・して・コスイす・（・クズイす・）・―ヨウす・（・クズイす・）・に・は・―――ロ―・（・ビリロクモク・）・に・）

＊「成」　259行と260行目の行間に、「三本云若欲成就龍女敬念之法以龍木作拔折羅」（墨筆）と記す。

○若（し）天龍藥叉・乾＝｛門＋垂｝婆・＊阿修羅（返）「ヲ」成就（せむ）と欲（は）者應（に）天木（返）「ヲ」以（て）拔折羅「ニ」作（る）[應]（再讀）（し）。（上260、・を・を・に・）

＊「阿」　補入符にて右傍に補入（墨筆）。

○若（し）龍女敬念（の）[之]法（返）「ヲ」成就（せむ）と欲（はは）龍木の根（返）「ヲ」以（て）拔折羅に爲（ツク）レ。（上261、・を・を・つくる・）

○若（し）變―形（の）[之]法（返）「ヲ」成就（せむ）と欲（はは）泥（返）「ヲ」以（て）之「ニ」作「レ」。（上262、・を・を・に・つくる・）

○若（し）起―＊死の法（返）「ヲ」成就（せむと）欲（は）者應（に）迦（去）談（上）婆（上）木（返）「ヲ」用（て）之「ヲ」作（る）[應]（再讀）（し）。（上263、・を・を・を・）

＊「死」　右傍に「屍イ」（墨筆）とあり。

○若（し）財（返）「ヲ」求（めむ）と欲（はは）應（に）鬪（上）迦（カ）（平）木（返）「ヲ」以（て）或（は）龍木「ヲ」用（て）・或（は）无憂木もて之「ヲ」作「レ」。（上264、・を・―カ―・（・アチケモク・）・を・を・を・つくる・）

○若（し）對敵（返）（を）成就（せむと）欲（は）者應（に）失（シ）（上）利（上）般（去）尼（上）木「ヲ」・或（は）＊奄（エ）沒（ムモ）「上」羅木・或（は）鬪（去）順（上）那木・或（は）柳（リウ）木「ヲ」以（て）・之（を）作（れ）。（上265、・シ―――・（・シチリバンニモク・）・を・エムモ―・（・エムモチラモク・）・リウ―・

（・ルモク・）・を・）

＊「奄」　右傍に「□ム」（朱筆）とあり。

○若（し）意樂（平）の法（返）（を）成就（する）を求（めむ）「ニハ」白檀木（返）「ヲ」用（て）或（は）紫檀木（返）「ヲ」用（て）拔折羅（に）作「レ」。（上266、・に・は・を・を・つくる・）

○上「ノ」如（き）所説（の）諸「ノ」拔折羅杵を［イ、拔折羅杵「ハ」］一一ニ皆（な）須ヰテ［而］五鈷・三鈷に作れ・。（上268、・の・の・は・に・もちゐる・て・）

○諸の妙端嚴「ニシテ」缺壞无「カラ」使（め）「ヨ」（上269、・-なり・（・タンゴムなり・）・す・て・なし・しむ・）

○念誦（返）「セムト」欲「ハム」時「ニハ」塗香等（返）「ヲ」以（て）［而］供養を＊作「セ」。（上269、・-す・（・ネムズす・）・む・と・おもふ・む・に・は・を・なす・）

＊「作」　補入符にて右傍に補入（墨筆）。

○大慈心（返）「ヲ」發（し）「て」手「ニ」金剛（返）「ヲ」執（り）「て」眞言「ヲ」念誦「セヨ」。（上270、・を・に・を・を・-す・（・ネムズす・））

○法事畢已（ら）は復（た）重「テ」供養を尊の足下（に）置「せよ」。（上270、・かさねて・）

○若（し）妙拔＊折羅（返）（を）執持「セ」不「ス」「シテ」（上271、・-す・（・シフヂす・）・ず・して・）

＊「折」　「折羅」の二字、補入符にて右傍に補入（墨筆）。

○其「ノ」形極「て」大「ナリ」。（上272、・その・おほきなり・）

○燒香（返）「ヲ」獻（する）時「ニ」法若（し）闕（返）（すること）有（れは）彼地（返）從（り）出（て）而便（ち）身「ニ」＊入（る）。（上272、・を・に・に・）

＊「入」　右傍に仮名（墨筆）があると思われるが、虫損により未詳。

○遂「ニ」行者（返）（を）令（て）［イ、［令］行者「ヲシテ」］諸「ノ」煩惱「ヲ」起（さ）［令］（再讀）（む）。（上273、・つひに・を・して・の・を・）

○爲（返）ハ所ル慳貪・諂曲・忿恚なり。（上274、・いふ・る・）

○＊頻（に）精（平）（返）（を）失シテ身（返）（を）令（て）不淨（なら）［令］（再讀）（む）。（上274、・しきりに・いたす・て・）

＊「頻」　「頻」字と「失」字の間に補入符（朱筆）あり。補入符の右下に「頻」（墨筆）とあり。

○名（けて）燈―頂「ト」曰（ふ）（上275、・と・）

○燈（返）を獻（する）［之］時「ニ」法若（し）闕（返）（すること）有（れは）彼即（ち）身「ニ」入（る）。［イ、入（り）「テ」］遂（に）行者（返）（を）令（て）［イ、［令］行者「ヲシテ」］種種の病「ヲ」生「セ」［令］（再讀）（む）。（上275、・に・に・て・を・して・を・-す・（・シヤウず・））

○爲（返）（は）所（る）心痛ム・壯―熱（音）シテ＊心「ヲ」。（上276、・いたむ・ト-す・（・シヤウネツす・）・て・を・）

＊「心」　同字の上に補入符（朱筆）あり。補入すべき語は記されていないが、『大蔵経』によれば「損」字の脱漏か。

○名（けて）笑＊花（と）曰（ふ）。（上277、）

＊「花」　右傍に「ヲ」（墨筆）とあるが、不審。二文字下の「獻花」

の「花」字に付すべき仮名を誤って付したものか。
○花（返）「ヲ」獻（する）［之］時「ニ」法若（し）＊闕（返）（すること）有（れは）彼即（ち）便（返）（を）得（て）遂「ニ」行者（返）（を）令（て）［イ、［令］行者「ヲシテ」］種種の＊障「ヲ」起（さ）［令］（再讀）（む）。（上277、・を・に・つひに・を・して・を・）
＊「闕」　右傍に「ハ」（墨筆）とあるが、未詳。
＊「障」　「に」のヲコト点らしき符号（朱筆）があるが、未詳。
○爲（返）ハ所ル壯ニ熱クして鼻塞リ噴（去）＊嚏［イ、噴「ホン」嚏「タイ」］［イ、噴「フン」嚏「サフ」］（し）眼の中「ヨリ」涙を出す［イ、出（し）「て」］支―骨酸「クル」（去）シク疼「ヒハラ」（平）「キ」［イ、酸疼「ヒル」「ミ」］［イ、酸「―」疼「トウ」（し）］・＊及（ひ）伴侶（返）與相「ヒ」―諍「あらそ」ヒて離散（する）「ナリ」。（上278、・いふ・る・さかりなり・あつし・ふさがる・はなひる・ホンタイす・（・ホンセフす・）・フンサウす・（・ホンセフす・）・より・くるし・ひひらく・ひるむ・アイトウす・（・サンドウす・）・あひあらそふ・なり・）
＊「嚏」　右傍に「口フシ」（墨筆）とあり。下方に「嚏」字の異体字「＝〈口＋庚＋辶〉」字（墨筆）を記す。
＊「及」　「及」字と「與」字の間に左寄りの合符（朱筆）あり。
○念誦（の）［之］時「ニ」・法若（し）闕（すること）有（れは）彼即（ち）便（を）得。（上280、・に・）
○遂（に）行者（返）（を）令（て）［イ、［令］行者（を）「して」］諸「ノ」病起（すること）有（ら）［令］（再讀）（む）。（上281、・の・）
○諸の毘那夜迦・身（返）「ニ」入（り）「テ」熾盛に心（返）「ヲ」令（て）迷惑（返）（せ）［令］（再讀）（め）西（返）「ヲ」以（て）東（返）（と）爲「オモ」ヒ諸の異相を作（さ）シム。（上281、・に・て・を・を・おもふ・しむ・）
○或（は）即（ち）吟―詠して或（は）緣「ヨ」レル事（返）无（くして）遊行（返）「ヲ」得（む）「ト」欲（ひ）心に異相（返）「ヲ」懷（き）て決（返）「セ」＊不（る）所有ルニ便（ち）邪見「返」「ヲ」起（し）「て」是（返）（の）如（き）言（返）「ヲ」作「して」或（は）大我の眞言（返）有（る）「コト」无「シト」説「ク」（上283、・よる・り・を・と・を・-す・（・クヱチす・）・あり・に・を・を・こと・なし・と・とく・）
＊「不」　右傍に「レ」（墨筆）あるが、未詳。
○亦（た）纏縛无（し）・及（ひ）解脱（返）「ヲ」以（て）持―誦の「ノ」「モ」ノ者其の「ノ」功（一）を「ヲ」＊虚（二）―捐（する）なり「ナリ」「ト」［イ、虚「シク」捐「ス」（と）］説（三）ク。（上285、・を・の・もの・その・を・なり・と・むなし・-す・（・エンす・）・とく・）
＊「虚」　「の」のヲコト点らしき符号（朱筆）があるが、未詳。
○此「ノ」邪見（返）（を）以「て」心（返）與相應して遂「ニ」此「ノ」言（返）「ヲ」出（し）「て」因果「ヲ」撥无す。（上286、・この・つひに・この・を・を・）
○手（返）「ヲ」以（て）草（返）「ヲ」斷「キ」リ＊及（ひ）土―塊「ツチクレ」（返）ヲ＊弄「モテアソ」ヒ眠ル時「ニハ」・齒（一）（返）「ヲ」＊嚙「カミ」（二）シ或（は）欲「ノ」想（返）「ヲ」起「シ」及（ひ）妻を娶「ト」ラム ト欲（ふ）。［イ、妻「ニ」娶「トツキ」「セムト」欲「ハヽ」］自「ミ（つか）」

（ら）愛 樂（する）者をは彼相「ヒ」愛「セ」不。（上287、・を・を・きる・つちくれ・を・もてあそぶ・ねぶる・に・は・を・はがみす・の・を・おこす・とる・む・と・に・とつぎす・む・と・おもふ・ば・みづから・アイ‐す・（・アイラクす・）・あひ‐す・（・あひアイす・）・じ・）

＊「及」　同字の左下に縦線（朱筆）があるが、未詳。

＊「弄」　左傍に「拵イ」（墨筆）とあり。本行も「拵」の字体で記されているが、字体統一の方針上「弄」字で反映している。

＊「嚙」　同字の下に「嚙」（墨筆）とあり。本行の字体が難読であった為であろうか。

○自（ら）樂愛（返）（せ）不（れ）は彼即（ち）愛樂「セム」。（上288、・‐‐す・（・アイラクす・）・む・）

○既（に）意（返）「ニ」順（は）不（上289、・に・じ・）

○臥「テモ」［而］睡（ら）不。（上289、・て・も・ねぶる・じ・）

○邪行（返）を作（さむと）欲（ひ）て竟―夜ラ眠ラ不。（上289、・よもすがら・ねぶる・）

○設―若ヒ睡（返）（るを）得は夢に大＊虫（訓）・師子・虎狼・猪狗「ニ」趁（返）メ所レ（たる）［イ、［所］趁「ハル」］［イ、趁「メ」所（れたる）］駝驢・猫兒・及（ひ）鬼・野干鷲鳥・鷺鷲・及（ひ）＝〔薫一草〕（去）胡（平）「一」を見「二」（む）。（上290、・たとひ・に・とむ・らる・をふ・（・おふ・）・る・せむ・メウジ・（・メウニ・）・さぎ・クン‐・（・クンゴ・））

＊「虫」　右傍に「鬼イ」（墨筆）とあり。

○或時に「ハ」夢に故―破の衣（返）を着（たる）不淨（の）［之］人を見「ム」。（上291、・は・の・を・きる・みる・む・）

○或時「ニハ」夢に裸形にして＊髡レタル［イ、髡「チタル」］

＊髮黑―體（の）［之］人を見（む）。（上292、・に・は・おほどる・たり・をつ・（・おつ・）・たり・）

＊「髡」　右傍に「苦門反」（朱筆）とあり。

＊「髮」　補入符にて下欄に補入（墨筆）。

○或時（に）は夢（に）＊裸―形「ノ」外道「ヲ」見（む）。（上293、・の・を・）

＊「裸」　右傍に「ヲ」（墨筆）とあるが、未詳。

○或（は）枯レ池・及―以（ひ）枯井を見（む）（上293、・かれいけ・）

○云何（そ）・如來・彼「ノ」誓願「ヲ」許シテ行人「返」「ヲ」惱亂（する）＊者法「返」「ヲ」令（て）成（せ）不（ら）［令］（再讀）（む）（上294、・かの・を・ゆるす・て・を・を・）

＊「者」　同字に返り点らしき符号（墨筆）があるが、未詳。

○唯「シ」大明眞言（の）［之］教（返）有（り）（上296、・ただし・）

○法（返）（の）如（く）修行（し）て斯の障難を免「レ（よ）」［イ、免「シ」］。（上297、・まぬかる・‐す・（・メンず・））

○是「ノ」故「ニ」行者・誦「スル」數・滿（し）已（り）て［イ、已（ら）「ハ」］・復（た）應（に）更に成就諸事の妙漫荼羅（に）入（る）［應］（再讀）（し）。此（の）法（返）（を）作（り）［イ、應（に）更（に）成就諸事（の）妙漫荼羅（に）

入（り）「テ」此「ノ」法「ヲ」作「ル」［應］（再讀）（し）］已（を）ハ
ヌ（れは）［イ、已（り）「ナハ」］彼（の）障難者・便即（ち）
退散シヌ。（上297、・この・に・-す・（・ズす・）・かず・ば
・て・この・を・つくる・をはる・ぬ・ぬ・ば・--す・（・
タイサンす・）・ぬ・）
○＊復（た）次（に）持誦「シ」供養「シ」及—以（ひ）護摩
「セムニ」・法教（返）「ニ」依「ラ」不（れ）は彼等便（返）
（を）得て［而］障難「ヲ」作（す）。（上300、・--す・（・
ヂズす・）・--す・（・クヤウす・）・--す・（・ゴマす・）
・む・に・に・よる・を・）
＊「復」　同字の上に丸印（朱筆）あり。右傍・上欄に「冊三」（共に
朱筆）とあり。
○又（た）行者・心「ニ」常（に）猶—豫して念念「ニ」疑（返）
「ヲ」生（し）爲（モ）シ此（の）明主（返）ヲヤ誦「セマシ」爲（モ）シ
彼（返）ヲヤ誦「セマシ」［耶］。（上301、・に・に・を・もし・
をや・-す・（・ズす・）・まし・もし・をや・-す・（・ズす
・）・まし・）
○是（返）（の）如（く）念（返）「ヲ」作「スニ」彼亦（た）
便「ヲ」得。（上302、・を・なす・に・を・）
○又復（た）行者多（く）義无（き）語して世俗の事（返）「ヲ」
談（し）或（は）興「—」易（ヤク）ヲ説キ或（は）田農（返）を（「ヲ」）説キ
或（は）名利（返）を論（す）。（上302、・を・-ヤク・（・コウ
ヤク・を・とく・を・とく・）
○斯等の語（返）「ヲ」説（く）「ニ」彼「ノ」障難者・自然（に）
便（返）「ヲ」得「テ」歩歩隨「—」遂「して」心（返）「を」
令（て）散亂（せ）［令］（再読）（む）。（上304、・を・に・か
の・を・て・）
○譬（は）人（返）有（り）「て」水（返）に尋（ソ）ヒテ［而］行（け）
は［イ、行（く）「に」］影水（返）「に」＊入（りて）形と影
と（を）現して隨遂して相「ヒ」捨離「セ」不（る）「カ」如
（し）。（上205、・そふ・て・あひ-・す・（・あひシヤリす・）
・が・）
＊「入」　「せよ」のヲコト点らしきもの（墨筆）があるが、未詳。
○毘那夜迦・行者の身（返）「ニ」入（り）「て」恆「ニ」相
（ひ）離（返）（れ）不（ること）亦復（た）是（の）如（し）
（上206、・に・つねに・）
○澡浴（の）［之］時「ニ」・便（返）（を）得（て）身「ニ」
入（る）。（上207、・に・に・）
○有（アルイ）「ハ」供養「ノ」時「ニ」便（返）「を」得「て」身「ニ」
入（る）。（上208、・あるいは・の・に・に・）
○譬（は）日の光照（す）に火珠（返）「ヲ」以（し）て［而］
便（ち）火出「ツルカ」如「シ」（上308、・を・いづ・が・ご
とし・）
○毘那夜迦・行者（の）身（返）（に）入（りて）念誦（の）［之］
時心（返）「を」令（て）散亂「返」（せ）［令］（再讀）（め）
貪瞋无明等の火（返）「ヲ」増＊長「スル」（こと）亦復（た）
是（の）如「シ」。（上209、・を・-・す・（・ソウチヤウす・）
・ごとし・）
＊「長」　右傍に「スル□」（墨筆）とあり。
○洗浴（の）［之］・＊時「ニ」法若（し）闕（返）「スルコト」

有「レハ」彼（カレ）即（ち）身（返）「ニ」入（りて）遂（ツヒ）「ニ」
［令］＊行「―」者（をして）種＊種「ノ」起（す）。［イ、
起（し）「テ」］（上311、・に・-す・（・コチす・）・こと・あ
り・ば・かれ・に・つひに・の・て・）
＊「時」　「時「ニ」法」の箇所は右傍に補入（墨筆）。
＊「行」　「をして」のヲコト点らしきもの（墨筆）があるが、不審。
本来なら「者」字に付されるべきものか。
＊「種」　『大蔵経』によれば「病」字の脱漏か。
○所爲（イハユ）「ル」飢渇・咳（カイ）（去）嗽（ソウ）・懈「―」怠・多「―」睡四支
沈重「なり」・（上311、・いはゆる・ガイソウ・（・ガイス・）
○名（け）て食香「ト」曰（ふ）。（上313、・と・）
○塗香（返）「ヲ」獻（する）時「ニ」法若（し）闕（返）（す
ること）有（れは）彼即（ち）身「ニ」入（る）。［イ、入（り）
「て」］遂（ツヒ）ニ行者（返）（を）令（て）［イ、［令］行者「をし
て」］腹「ニ」病（を）起（すこと）有（ら）［令］（再読）（む）。
（上313、・を・に・に・つひに・に・）
○爲（イ）（返）ハ所ル思想「して」・生縁の處（返）「ヲ」憶「ヒ」
或（は）餘「ノ」處（返）「ヲ」思（ひ）或（は）寡人（返）「ヲ」
思（ひ）て［而］懈怠「ヲ」生「ス」。（上314、・いはゆる・を
・おもふ・の・を・を・を・-す・（・シヤウず・））
○或（は）欲想（返）（を）思（ひ）て諸境「ヲ」分別す。（上
315、・を・）
○＊又（た）＊四瓶（もて）・次第（に）應（に）頂（返）に灌（ソヽ）
ク［應］（再読）（し）（上316、・そそく・）
＊「又」　同字の上に丸印（朱筆）あり。右傍・上欄に「冊六」（共に
朱筆）とあり。
＊「四」　上欄に「十五〈四瓶／下〉」（墨筆）とあり。
○作法已（ら）は彼の所着の障即（ち）解脱「ヲ」得。（上316、
・を・）
○此の漫荼羅は獨（り）［イ、獨「音」］能（く）毘那夜迦（返）
「ヲ」除（く）に非「す」（上317、・を・）
○亦（た）衆生の種種の勝願「ヲ」滿「す」。（上317、・を・）
○謂（イハユ）ル工（平）商（平）農（平）士（去）・男女・失（入）昏（コン）・
是（返）（の）如（き）等の事心（に）稱（カナ）ハ不（る）「コト」无
「シ」。（上318、・いはゆる・-コン・（・シチコン・）・かなふ
・こと・なし・）
○魍魎「ニ」着（クルホ）（返）（さ）所（れ）［イ、所着「レ」］及（ひ）
＊然熱（返）を患ヘム孩（カイ）「去」子「ノ」・鬼魅（クルホサ）に着（返）サ所（レ）及
（ひ）精（平）（を）吸フ靈（平）・鬼（平）「ノ」・常（に）惡
夢（返）（を）見（ると）癲（平）＝〔疒＋間〕（平）等の病所（アラユ）＊有
ル一＊切の病（やまヒ）ニ・此の漫荼羅の法（返）「ヲ」作（り）自（ら）
灌頂（し）已（ら）は上（返）（の）如（き）等の類の求（め）
「―」窺（ノソ）（返）マム所の者皆（な）滿足（せ）は諸―餘（の）
病＊＝〔疒＋尓〕（平）亦復（た）能（く）除カム（上319、・に
・くるほす・くるほす・る・うれふ・む・ガイ-・（・ガイシ
・）・の・くるほす・る・すふ・の・あらゆる・やまひ・に・
を・のぞむ・む・-シン・（・ビヤウシン・）・のぞく・む・）
＊「然」　『大蔵経』では「壯」字とする。
＊「有」　補入符にて右傍に補入（墨筆）。
＊「切」　「＝〔切－刀＋入〕」字を重書にて訂す（墨筆）。

＊「ﾊ（疒＋尓）」　左傍に「目忍反直引反疾也」（墨筆）とあり。
○＊時（に）彼の行者・諸の障難（返）「ニ」於（て）解脱（返）「ヲ」得已レハ身心清浮にして諸「ノ」垢穢无（し）。［イ、无（き）「コト」］譬（は）明「｜」月の雲（返）従於（り）［イ、［従於］雲「ヨリ」］出（て）風（に）撃タレ［イ、風撃「チ」］雲除テ暉（平）麗（去）シク［乎］天（返）を光「スカ」如（し）（上324、・に・を・をはる・ば・の・こと・の・より・うつ・る・うつ・のぞこる・て・ひかり・うるはし・を・てらす・が・）
＊「時」　同字の上に丸印（朱筆）あり。右傍・上欄に「卌九」（共に朱筆）とあり。
○行者の所修の種種の功徳もて毘那夜迦の所作の障難皆（な）悉（く）消滅（する）こと（も）亦復（た）是（の）如（し）（上326、・こと・）
○＊所以（の）眞言・成就（する）「ヲ」得不。（上327、・を・）
＊「所」　同字の上に丸印（朱筆）あり。右傍・上欄に「五十二」（共に朱筆）とあり。
○＊譬（は）種子・地及（ひ）時・并「ニ」雨「ノ」・漑「去」キ澤シ調順の好と風（返）に因（り）て＊然芽生「シ」＊及（ひ）成就ニ至ル可「キカ」如「下」（し）。（上327、・ならびに・の・そそく・うるをす・（・うるほす・）・ゲ・-す・（・シヤウず・）・に・に・いたる・べし・が・）
＊「譬」　同字の上に丸印（朱筆）あり。右傍・上欄に「五十三」（共に朱筆）とあり。
＊「然」　右傍に「モノ」（墨筆）らしき仮名があるが、未詳。
＊「及」　右傍に「乃イ」（墨筆）とあり。
○然「モ」其の種子若（し）倉の中（返）「ニ」在（ら）は芽スラ尚（ほ）＊生「セ」不（上329、・しかも・に・すら・-す・（・シヤウず・））
＊「生」　「主」字を重書にて訂す（墨筆）。
○況（や）復（た）枝葉・及（ひ）花菓實「上」ヲヤ（上329、・をや・）
○眞言（返）「ヲ」＊持誦（するも）法則（返）「ニ」依（ら）不（上330、・を・に・-・-す・（・クヤウす・））
＊「持」　同字の上に丸印（朱筆）あり。右傍・上欄に「五十一」（共に朱筆）とあり。
○其（の）眞言の字或（は）加「｜」減「返」有「リて」聲「｜」相正「シ」（から）不。（上330、・くははり・あり・ただし・）
○廣大ノ諸の妙悉地（返）「ニ」成（せ）＊不（ること）亦復（た）是（の）如（し）（上331、・の・に・）
＊「不」　同字の上に丸印（朱筆）あり。右傍・上欄に「五十四」（共に朱筆）とあり。
○＊譬（は）雲（返）（を）興シ雨（返）を下ス［イ、興雲「ノ」雨（を）下（す）］　諸の草木（返）「ニ」隨（ひて）而滋―茂（返）を含（むに）大小「ノ」花菓・差別等（返）（しから）不（る）「カ」如（し）（上332、・おこす・くだす・の・に・の・が・）
＊「譬」　同字の上に丸印（朱筆）あり。右傍に「五十五」（朱筆）とあり。

○持誦（の）［之］人「ノ」・施（返）（す）所の「ノ」功勞其の増減に隨（ひて）福（返）「ヲ」獲（る）「コト」多「ク」少（け）「レハ」獲（返）（る）所の［イ、所獲「ノ」］成就を「モ」亦復（た）是（の）如（し）（上333、・の・の・を・こと・おほし・すくなし・ば・の・も・）

○＊若（し）其れ［イ、其「ノ」］行者清淨（の）處（返）（に）於（て）［イ、［於］清淨「ノ」處「ニシテ」］＊及（ひ）時―節（返）「ニ」依「リ」所制（の）［之］＊法亦（た）罪を＊戲―犯して［イ、戲犯「スルコト」］漸く須（く）滅して［イ、滅「シ」］・福聚圓滿（に）「して」・能（く）眞＊言「ノ」沽（ウルホヒ）及（ひ）成就を獲［須］（再讀）（し）。（上335、・その・の・に・して・に・よる・‐‐す・（・ケボムす・）・こと・‐‐す・（・メツす・）・の・うるほひ・）

＊「若」　同字の上に丸印（朱筆）あり。右傍に「五十」（朱筆）とあり。

＊「及」　「及」字と「依」字の間に、左寄りの合符（朱筆）あり。

＊「法」　返り点（朱筆）があるが、未詳。

＊「戲」　同字の上、「虧」字を補入符にて右傍に補入（墨筆）するも未詳。

＊「言」　句点（朱筆）あり。

○＊若（し）罪滅（返）（せ）不（す）功德（返）（を）生（せ）不法則（返）「ニ」依（ら）不（す）（は）眞＊夢に破壞の［イ、破壞「シテ」］人ノ・棄捨（返）（せ）所（れ）タルヲ［イ、棄捨（せ）所「ルヽヲ」］見　或（は）石碓（ツチ）［イ、石―碓（ツイ）］（を）見　或（は）恐＊怖（し）難「ヲ」畏（れる）［之］人ノ手に槍（サウ）・刀・及（ひ）―諸の器仗（返）を執（り）て來（り）て相「ヒ」害（せむ）「ト」欲（ス）（二）「ト」見（二）（る）。（上337、・に・‐‐す・（・ハヱす・）・て・の・たり・を・らる・を・いしつち・‐ツイ・（・ジヤクツイ・）・を・の・サウ・あひ‐す・（・あひガイす・）・と・す・と・）

＊「若」　同字の上に丸印（朱筆）あり。右傍・上欄に「卅七」（共に朱筆）とあり。

＊「夢」　上欄に「十□（夢見／下）」（墨筆）とあり。

＊「怖」　補入符にて右傍に補入（墨筆）。

○若（し）此「ノ」相（返）有（ら）は即（ち）彼等の毘那夜迦の障難を作（さ）令（む）。（上340、・この・）

○＊行者即（ち）軍荼利忿怒明主の眞言（返）（を）用て［而］護身を作「レ」。（上340、・つくる・）

＊「行」　同字の上に丸印（朱筆）あり。右傍に「卅八」（朱筆）とあり。

○上「ノ」如（く）説（返）（く）所（の）［イ、所説「ノ」］護摩は［イ、護摩「ノ」］障難悉（く）解脱（返）「ヲ」得「テ」惱亂（すること）能（は）不。（上341、・の・の・の・を・て・）

○若（し）彼の眞言（返）「ヲ」念誦（すること）有（ら）者（は）諸の毘那夜迦・終「ニ」便（を）得不。（上342、・を・つひに・）

○＊復（た）次（に）彼の所着の障（返）（を）除（き）解脱（返）を＊爲（セ）ムト欲（は）は［者］即（ち）應（に）此の妙漫荼羅に依（る）［應］（再讀）（し）。（上344、・す・む・と・）

＊「復」　同字の上に丸印（朱筆）あり。右傍・上欄に「冊五」（共に朱筆）とあり。
＊「爲」　右傍に「得也」（朱筆）とあり。
○其（れ）牛群「ノ」所居（の）［之］處「ニ」・或（は）樹下に有（り）。（上345、・の・に・）
○或（は）神「平」廟「ニ」・或（は）四衢（ク）道「ニ」・或（は）空閑の室「ニ」＊有（り）。（上345、・に・-ク-・（・シグダウ・）・に・に・）
＊「有」　「を」のヲコト点（朱筆）があるが、未詳。
○或（は）林の中（返）に於（て）［イ、［於］林（の）中（に）「して」］五色ノ彩（返）ヲ＊以（て）漫荼羅「ヲ」作「レ」。（上346、・の・いろ・を・を・つくる・）
＊「以」　同字の一部を墨筆にて補った跡あり。
○其の量「ハ」頓方（ホウ）四肘にして［イ、四肘（に）「セヨ」］四門を安立せよ。（上347、・は・-ホウ・（・トンハウ・）・す・）
○中（返）（に）於（て）二肘「ハ」・方（ホウ）―量「ニ」＊抗（アナ）（返）ヲ穿（ウカ）テ［イ、穿「レ」］＊坑「ノ」内「ニ」布「クニ（ニ）」茅草「ヲ」以（し）坑の外「ノ」＊雨肘に各（の）位座（返）「ヲ」分（わ）カ「テ」て明主・眞言主等を安置セヨ。（上348、・は・ホウ-・（・ハウラウ・）・に・あな・を・うがつ・て・ほる・の・に・しく・に・に・を・の・を・わかつ・て・--す・（・アンチす・）
＊「抗」　『大蔵経』では「坑」字とする。
＊「坑」　本来脱漏していた文字を、墨筆にて書き入れた跡あり。
＊「兩」　『大蔵経』では「兩」字とする。
○［於］八方の所に各（の）本方の大神「ヲ」畫（け）。（上349、・を・）
○復（た）四箇の新（し）「キ」瓶を取（れ）。（上350、・あたらし・）
○黑色にして大（た）＊燋（コカ）レ（たる）者を得不れ。（上350、・こがる・）
＊「燋」　同字の下に一字あるも、虫損により不明。右傍に「カマレキ」（朱筆）とあり。『大蔵経』では「生」字とする。
○香水（返）を盛（り）滿（て）て＊及（ひ）＊寶「上」・幷（せ）て［イ、幷「ニ」］赤蓮花・諸の花樹の（ノ）枝（返）を［イ、枝「ノ」］以て皆（な）＊瓶中「ニ」。（上351、・ならびに・の・の・に・）
＊「及」　「及」字と「以」字の間に、左寄りの合符（朱筆）あり。
＊「寶」　同字の上に一字あると思われるが、虫損により不明。『大蔵経』では「五」字とする。
＊「瓶」　同字の上に一字あると思われるが、虫損により不明。『大蔵経』では「内」字とする。
○五色の線（イト）（返）ヲ以「て」其「ノ」瓶の項（ウナシ）（返）ニ［イ、項（クヒ）「ニ」］纏（まツ）フテ［於］四方に安（せよ）。［イ、安（し）「て」］（上352、・いと・を・その・うなじ・に・くび・に・まつふ・て・）
○然して後「ニ」應（に）彼の＊朋主等（返）「ヲ」請「して」諸「ノ」供養「ノ」具（返）「ヲ」以（て）而（しうし）て之「ヲ」供養「す」［應］（再讀）（し）。（上352、・に・を・の・の・を・を・）
＊「朋」　『大蔵経』では「明」字とする。
○復（た）酒「・」肉・蘿蔔・及―以（ひ）衆多「ノ」波＊羅

＊羅食（返）「ヲ」以「て」彼等の八方の大神・及（ひ）諸の一切の毘那夜迦に供養せよ。（上353、・の・を・）

＊「羅」　「の」のヲコト点（朱筆）あり。

＊「羅」　補入符にて右傍に補入（墨筆）。

○彼の着障（の）［之］人（返）「ヲ」呼（ひて）＊塊の中（返）「ニ」入（り）「テ」東（返）「ニ」向（ひ）而坐（せ）令（め）「ヨ」。（上355、・を・に・て・に・しむ・）

＊「塊」　『大蔵経』では「坑」字とする。

○然して後「ニ」彼の所置（の）［之］瓶（返）を取（り）て軍吒利明主・囉枳（上）〈「二／合」〉當（タ）〈「去」〉伽（上）〈＊此／云赤／形〉明主・及（ひ）繼（上）唎（上）〈二／合〉吉（キ）（上）囉（上）〈二／合〉明主・捺（上）羅（上）〈二／合〉弭（上）良（ラ）（上）拿（上）〈短二／合〉明主等の眞言（返）「ヲ」以「て」其「ノ」瓶（返）「ヲ」持誦（せ）「ヨ」（上355、・に・ラ‐タ‐・（・ラキタウギヤ・）・キ‐キ‐・（・ケリキチラ・）・‐‐‐‐ラ‐・（・ナツラミラウナ・）・を・その・を・‐‐す・（・ヂズす・）

＊「此」　「に」と「は」のヲコト点（朱筆）あり。

○數（カ）百（ス）に過（くれは）與（ソ）ニ彼の頂に灌（タメ）ケ（上358、・かず・ために・そそく・）

○是（返）（の）如（く）就（ヨ）ク［イ、就（スナハ）（ち）］應（に）夢の中（返）「ニ」入（りて）障の因（返）「ヲ」見示（す）［應］（再讀）（し）（上358、・よく・すなはち・に・を・）

○眞言の字にて＊加減シ或（は）法（の）具せ不（す）（ニ）有（る）を＊説（ニ）（く）［イ、眞言（の）字（に）加減有「ルソトモ」或（は）＊法「ノ」具（せ）不（サ）「ルソトモ」＊説（く）］。（上359、・‐‐す・（・ケゲムす・）・あり・ぞ・とも・の・ず・ぞ・とも・）

＊「加」　右傍に「シ」（朱筆）を擦り消した跡あり。

＊「説」　「の」のヲコト点（朱筆）らしき符号があるが、未詳。

＊「法」　補入符にて右傍に補入（墨筆）。

＊「説」　右傍に「ニハム」（墨筆）とあるが、未詳。

○然も諸の明主・自（ら）此の法（返）を説キ行「｜」用（返）有（る）「トキニハ」［者］［於］＊破―相を示現（す）　好（コトナ）キコト［イ、［於］破（れ）「タル」相好「ヲ」示現「す」］・由（ナ）ホ海潮の終に時を違（へ）不（る）か如（く）して［イ、如「シ」］。其（れ）實には眞言「ハ」・終に相（ひ）破（返）せ不（す）（上360、・とく・とき・に・は・ことなし・こと・たり・を・なほ・ごとし・は・）

＊「破」　左傍に丸印（墨筆）あり。

○亦（た）相（ひ）斷して及與（ひ）繼（ケイ）（去）縛せ不（す）。（上361、・ケイ‐す・（・ケバクす・）

○譬（は）二（り）の親友（の）［之］人有（り）。中（返）「ニ」於（て）一（返）リ有（り）て彼（の）友（トモ）（返）ニ語（かたラ）フテ言（は）く今（返）從（り）＊以（て）去（り）其の家（返）「ニ」往（き）乃至（し）彼の人「ヲ」語（ふ）「コト」勿れ。是「ノ」友（返）（を）敬（する）「カ」故（に）言誨に［イ、言誨「ヲ」］違（たカ）（へ）不（す）。即（ち）之（返）（コ）ニ［イ、之ニ］往キ乃至（し）語話（火イ）（入）（返）（せ）不（るか）如（ソコ）「三」く（上362、・に・ひとり・とも・に・かたらふ・て・に・を・こと・この・が・を・たがふ・ここ・

に・そこ・に・ゆく・‐クワイす・（・ゴクワイす・））

＊「以」　補入符（朱筆）あり。右傍に同字を補入（墨筆）。

○故に行人應（に）明主及（ひ）眞言（返）を相（ひ）破す［應］（再讀）（から）不（し）て乃至（し）繼縛して及―以（ひ）妙漫荼羅を禁＊斷「スヘ」（し）。（上364、・‐‐‐す・（・コムダンす・）・べし・）

＊「斷」　右傍に「スヘ□」（墨筆）とあり。

○亦復（た）應（に）彼の法を迴（か）（平）シ＊換（平）「ス」［應］（再讀）（から）不（す）。（上366、・かへす・クワンす・（・グワンす・））

＊「換」　右傍に「火（墨筆）ン（朱筆）□（朱筆）」（火ン）とあり。

○亦復（た）應（に）阿（平）吠（上）（去）＊設（上）那（上濁）ス［應］（再讀）（から）不。（上367、・‐‐‐‐‐‐す・（・アバイセチナす・））

＊「設」　右傍に「守護」（朱筆）とあり。

○彼（返）「ヲ」害（せむ）「カ」爲の故「ニ」應（に）護摩「シ」及（ひ）支節（返）を損「シ」鬼族（を）摧滅す［應］（再讀）（から）不。（上367、・を・が・に・‐‐‐す・（・ゴマす・）・‐す・（・ソンず・））

○亦復（た）應（に）他（返）を令（て）［イ、［令］他「ヲシテ」］癡―鈍に（して）［イ、癡鈍「ナラシメ」］及―以（ひ）悶―眠「セシム」［應］（再讀）（から）不。（上368、・を・して・‐‐‐なり・（・チドンなり・）・しむ・‐‐‐す・（・モンメンす・）・しむ・）

○應（に）龍魅（の）［之］類を＊科―罰「入」「ス」［イ、罪（ツミス）罰］［應］（再讀）（から）不。（上369、・‐‐‐す・（・クワボチす・）・つみす・）

＊「科」　右傍に「苦和反斷也」（朱筆）とあり。

○應（に）人（返）ヲ令（て）相（ひ）―＊增（返）ムコトヲ發起して及（ひ）損し厭し縛す［應］（再讀）（から）不（す）。（上369、・を・あひそねむ・こと・を・）

＊「增」　『大蔵経』では「憎」字とする。

○應（に）＝〔女（ヤウ）＋嬰〕兒（の）［之］魅（スタマ）（を）［イ、魅（タフ）レタルヲ］治療す［應］（再讀）（から）不・（上370、・ヤウ‐・（・ヤウニ・）・すだま・たふる・たり・を・）

○應（に）＝〔水＋口＋又〕諸の衆生類（返）を＊捕フ［應］（再讀）（から）不（上370、・とらふ・）

＊「捕」　読点（朱筆）あり。

○＊復（た）次（に）餘外の・宗「ニ」説「カク」十種の法（返）「ヲ」具「して」眞言成（するを）得（上372、・に・とかく・を・）

＊「復」　同字の上に丸印（朱筆）あり。右傍・上欄に「五十六」（共に朱筆）とあり。

○爲（イ）（返）「ハ」所（る）行人「ト」・眞言「ト」・伴侶「ト」・所成就「ノ」物「ト」・精勤「ト」・處―所「ト」・淨地「ト」・時節「ト」・本尊「ト」・財物なり［イ、財物「トナリ」］。（上372、・いはゆる・と・と・と・の・と・と・と・と・と・と・と・なり・）

○此の十法（返）を具して成就「ヲ」得「ト」言フ。（上374、・を・と・いふ・）

○又（た）餘宗の説（かく）・三種の法（返）を[ヲ]具（して）眞言乃（ち）成す。（上374、・を・）
○謂（返）（は）所（る）＊眞言「ト」行人「ト」・伴侶なり・（上375、・と・と・）
＊「眞」　本行では同字の上に「爲」字を記し、右傍に「イ无シ」と注記（墨筆）する。
○又（た）餘宗の説（かく）四種の法（返）「ヲ」具「して」眞言乃（ち）成（す）（上375、・を・）
○謂（る）・處所「ト」・精勤「ト」・時節「ト」・依―法なり「イ、依法「トナリ」」。（上376、・と・と・と・と・なり・）
○又（た）餘宗「ノ」説（かく）五種の法（返）「ヲ」具「して」眞言乃（ち）成（す）。（上376、・の・を・）
○謂（る）眞言「ト」・所成就の物「ト」・處所「ト」・本尊「ト」・物なり「イ、物「トナリ」」。（上377、・と・と・と・と・と・なり・）
○是（返）（の）如（き）諸宗＊成（は）＊干法に「イ、十法「ト」」説（く）。（上377、・と・）
＊「成」　『大蔵経』では「或」字とする。
＊「干」　『大蔵経』では「十」字とする。
○或（は）八法「ト」説（き）或（は）六或（は）四或（は）三或（は）＊三又（た）本法（返）に於て演説不同なり。（上378、・と・）
＊「三」　『大蔵経』では「二」字とする。
○然も此の釋教に二種の法（返）「ヲ」具「して」眞言＊乃（ち）一者行人・二者眞言なり・（上379、・を・）
＊「乃」　同字の下に一字あると思われるが、虫損により未詳。同箇所、『大蔵経』では「成」字とする。
○爾人「ハ」・具「ニ」戒律・正勤・精進（返）（を）以（て）「イ、戒律「返」「を」以「て」正勤精進（し）」他の利養（返）「ニ」於（て）貪嫉「ヲ」起（さ）不。（上380、・は・つぶさに・に・を・）
○身命財（返）「ニ」於「て」常「ニ」戀着（返）无（し）（上381、・に・つねに・）
○眞言の文字・圓滿・聲相分明に「シテ」成就（す）可（き）法皆（な）悉（く）具足「セリ」（上381、・して・‐‐す・（・グソクす・）・り・）
○佛菩薩の所居（の）「之」＊處「返」に於[し]「て」。＊言成＊就（返）（せ）不（ること）上（返）（に）翻（して）應（に）知（る）「應」（再讀）（し）。（上382、
＊「處」　「も」のヲコト点らしきもの（墨筆）があるが、未詳。
＊「言」　右傍に「イハ」（朱筆）とあるが、未詳。上欄に「六〈言不／下〉」（墨筆）とあり。383行と384行の行間に、墨筆にて「眞言不成〈三卷／本〉十五終有眞字十六始有言字故眞言不成也」と記す。
＊「就」　右傍に「イ无シ」（墨筆）とあり。
○＊復（た）次（に）行者・念誦（返）（に）於て時（に）中間に闕犯（返）（する）所有（り）或（は）間斷（返）有（り）「て」本の所―誦（返）「ヲ」＊棄て別に餘の明主（返）「ヲ」持「シ」[ミ（つか）]自（ら）＊持（する）所（の）者（を）他人「ニ」授與「セルハ」。念誦「ノ」遍數・滿（返）（つ）「ト」雖（も）成「セ」不[す]。（上384、・を・を・‐す・（・ヂす・）・みづから

・に・‐‐す・（・ジュヨす・）・り・は・の・と・‐す・（・ジヤウず・）

＊「復」　同字の上に丸印（朱筆）あり。右傍・上欄に「五十七」（共に朱筆）とあり。

＊「棄」　「本」字の上に補入符（朱筆）あり。右傍に同字を補入（墨筆）。

＊「持」　「は」のヲコト点らしき符号（朱筆）と、右傍に「ノハ」の仮名（墨筆）があるが、共に未詳。

○復（た）更（に）應（に）須（く）毎日三時に法（返）「ノ」如「ク」供養念―誦「して」數・十＊方遍を滿（す）［應］（再讀）（し）。［イ、十方遍（に）滿（つれ）「ハ」］即（ち）應（に）法（返）（の）如（く）護摩「ス」［應］（再讀）（し）。（上386、・に・の・ごとし・ば・‐‐す・（・ゴマす・）

＊「方」　『大蔵経』では「萬」字とする。

○當（に）大麥（返）「ヲ」以（て）稻「―」花（返）を用て或（は）巨勝ヲ以（て）・或（は）白芥子ノ隨（ひて）其の一（返）「ヲ」取（り）蘇（返）與相（ひ）和「して」數十千・或（は）八七千・或（は）四三千ヲ滿（せ）。（上387、・を・コ・（・ゴ・）・こま・こま・を・の・を・を・）

○憂曇鉢羅木・或（は）阿説他木・或（は）波羅賒「上」木・或（は）閼迦木（を）以（て）・或（は）龍木（を）以（て）・或（は）无憂木　或（は）密魯婆（上）木　或（は）倶陁木・或（は）唵（平）沒（上）羅木　或（は）却（去）陁羅木・或（は）＊賒彌「上」木・或（は）鉢落木・或（は）阿波末伽木・或（は）＊未度「上」迦木・或（は）湛□□木（を）用て・隨（ひて）一「ノ」木（返）「ヲ」取（り）麁細「は」指如［イ、指（の）如（く）「セヨ」］（上389、‐‐シヤ‐・（・ハラシヤモク・）・‐マ‐‐・（・オムモツラモク・）・‐ミ‐・（・シヤミモク・）・‐ラ‐・（・ハチラクモク・）・‐‐マ‐‐・（・アハマツギヤモク・）・マ‐‐‐・（・ミドキヤモク・）・タ‐‐・の・を・ばかり・す・）

＊「賒」　本行では「彌木」字の下にあった文字を、墨筆にて上に移動。

＊「未」　『大蔵経』では「末」字とする。

○長「ハ」十指「ニ」・截（ち）て［イ、截（つ）「。」］［於］蘇密酪（に）・柴の兩の頭（返）を＝｛手＋日＋皿｝イテ毎日に護摩「セヨ」（上394、・は・に・を・さく・て・‐‐す・（・ゴマす・）

○數・上「ニ」説（く）「カ」如（し）。（上394、・に・が・）

○前「ニ」闕＊犯（せは）還「て」清淨（を）得。（上395、・に・）

＊「犯」　返点らしき点（朱筆）があるが未詳、『大蔵経』によれば「闕」字の上に「所」字の脱漏か。

○然（る）後「ニ」方「ニ」眞＊言の悉地を求「メヨ」。（上395、・に・まさに・もとむ・）

＊「言」　補入符にて右傍に補入（墨筆）。

○＊復（た）次（に）行者・所持「ノ」眞言「ヲ」・餘「ノ」持誦繫縛の明主を［イ、明主「ヲ」持誦繫「―」縛「シ」］・或―若ハ釘もて打「チ」・或（は）斷「シ」或（は）破「して」成就（せ）不（ら）令（む）。（上397、・の・を・の・を・‐‐す・（・ケバクす・）・あるいは・うつ・‐す・（・ダンす・）

＊「復」　同字の上に丸印（朱筆）あり。右傍・上欄に「五十九」（朱筆）とあり。
○即（ち）須（く）應（に）本尊の形像（返）「ヲ」作す［應］（再讀）（し）（上398、・を・）
○然して後「ニ」・繼（去）利（上）・吉（上）羅（上）等の諸部の明主・大威「ノ」眞言（返）「ヲ」以（て）蘇密を誦持「して」本尊を灌浴せよ。（上399、・に・の・を・）
○是（の）如（く）十日「セヨ」（上400、・す・）
○此「ノ」法（返）「ヲ」作「リ」已（り）「ナ」は餘の所縛（返）を被（り）即（ち）解脱（を）得。（上401、・この・を・つくる・ぬ・）
○＊復（た）次（に）行者・眞言（の）中（返）（に）於（て）制（返）（する）所（の）諸の法［イ、眞言「ノ」中「ノ」所制「ノ」諸（の）法「返」「ニ」於（て）］竝「ニ」皆（な）修行「セヨ」（上402、・の・の・の・に・ならびに・‐‐す・（・シユギヤウす・））
＊「復」　同字の上に丸印（朱筆）あり。右傍・上欄に「五十八」（共に朱筆）とあり。
○一（つ）ヲモ遺闕（する）「コト」无レ。（上402、・を・も・こと・なかれ・）
○仍「ナ」「ホ」成（返）「セ」不（れ）者「ハ」即（ち）應（に）諸の猛毒（返）を以「て」彼の尊形（返）を作（り）テ繼唎吉羅等の諸部の明主の眞言もて其（の）像形（返）を截（ち）て段段に「ニ」行（返）を［イ、行（を）］［イ、行「ハント」］爲「ナ」「シテ」白芥子油（返）に和して毎日三時に［而］護摩「ヲ」作「レ」。（上403、・なほ・‐す・（・ジヤウず・）・ば・て・だんだんに・コン・ヘン・おこなふ・む・と・なす・て・を・つくる・）
○是（返）（の）如（く）七日セハ即（ち）悉地（を）得。（上405、・す・ば・）
○是「ノ」故「ニ」諸法は・皆（な）心（返）（に）從（り）生（す）（上406、・この・に・）
○无自縁「ニ」非（す）。（上407、・に・）
○亦（た）我（返）「ニ」從（り）「て」能「く」諸法を生（する）「ニ」不「ス」。（上408、・に・に・あらず・）
○但（た）无明（返）「ニ」由（り）生死に流轉す。（上408、・に・）
○四大和「―」合「して」名（返）を假「カ」（り）て［イ、假「ニ」名（け）「テ」］色ト爲す。（上409、・かる・かりに・て・と・）
○是（返）（の）如（き）四蘊「モ」・應（に）知（返）（る）［應］（再讀）（し）　是（れ）空なり。（上410、・も・）
○由「ナ」「ホ」聚沫「マツ」（入）の如（し）。（上411、・なほ・‐マツ・（・ズマツ・））
○受（は）浮泡「ハウ」ノ如（し）。（上411、・‐ハウ・（・ブヘウ・）・の・）
○＊復（た）次（に）念誦の・數足リ・悉地近「ちか」「ッ」カム（と）欲（れ）は即（ち）＊推―夢の中に是（返）（の）如（き）事「ヲ」見（る）。（上414、・たる・ちかづく・む・を・）
＊「復」　同字の上に丸印（朱筆）あり。右傍・上欄に「六十七」（共に朱筆）とあり。
＊「推」　右傍に「□□□□」（朱筆）とあり。

○或（は）師子大虫・及（ひ）馬（返）に騎リ　大高山（返）「ニ」昇（り）　虚空「ノ」中（返）「ニ」於（て）大（な）ル雷の聲（返）「ヲ」聞キ（上415、・のる・に・の・に・おほきなり・を・きく・）

○或（は）犀（サイ）牛・白象・特牛（返）　（に）騎（り）（上417、・サイ‐・（・サイグ・））

○或（は）錢財・花鬘・及（ひ）衣（返）を得（エ）（上417、・う・）

○或（は）酒宍水類（の）［之］果（返）「ヲ」＊得（上418、・を・）

＊「得」　「せ」のヲコト点らしき符号（朱筆）があるが、未詳。

○或（は）紅蓮花經・及（ひ）尊容（返）を得（上418、・う・）

○或（は）駱＊駝（ラク）・幷―與（に）犢子（返）（を）得（上419、・‐ラク・）

＊「駝」　右傍仮名「ラク」は底本のまま。

○或（は）滿載（の）［之］車・□＊線・□拂（ハヘハラヒ）ヲ獲（上419、・はへはらひ・を・）

＊「線」　「＝（土＋泉）」字を重書にて訂す（墨筆）。

○＊舄（セキ）［イ、舄（ハキモノ）］履（リ）（返）（を）＊獲（上420、・セキリ・（・シヤクリ・）・はきもの・）

＊「舄」　419行上欄に「舄（思積／反）」（墨筆）とあり。

＊「護」　同字の上に一字あると思われるが、虫損により未詳。『大蔵経』では「竝」字とする。

○或（は）横刃孔雀の尾扇（去）・金□寶珠螺貝・復（リ□）（去）却（キヤ）（上）端嚴の美（上）＊女（上）（を）得。（上420、・リ□キヤ・（・リカク・））

＊「女」　右傍に仮名（朱筆）があると思われるが、虫損により未詳。

○或（は）己カ母（返）を見（上422、・が・）

○或（は）諸寶の嚴身の［之］具（返）を得及（ひ）臥具の覆（ふ）ニ白衣（返）「ヲ」以（する）を得（上422、・に・を・）

○或（は）自身・大海（返）に［イ、大海「ヲ」］汎（ウカ）ヒ過キ［イ、汎過「シ」］及（ひ）江河・龍池・＊池陂（ヒ）泊（返）を渡（わ）リ及―以（ひ）飲＊浴（返）スレ（を）見（上423、・を・うかぶ・すぐ・ホム‐す・（・ホムクワす・）・ヒ‐・（・ヒバク・）・わたる・‐‐す・（・オムヨクす・））

＊「池」　同字左傍に二本線（墨筆）あり。前字と重複する為の見せ消ち符号か。また斜線（朱筆）もあるが、未詳。

＊「浴」　右傍仮名は底本のまま。

○或（は）血（返）「ヲ」以（て）自身（返）を澡浴すと見（上424、・を・）

○或（は）入寺・制底・僧房（返）を［イ、寺制底僧房「ニ」入（ると）］見（上424、・に・）

○或（は）大力ノ阿修羅衆・淨婆羅門（返）を見（上427、・の・）

○或（は）意樂の丈夫・及―以（ひ）女人・富＊貴（入輕）＊端―直（チヨク）（入）善心ノ長者（返）（を）見（上427、・‐チヨク・（・タンヂキ・）・の・）

＊「貴」　右傍に仮名（墨筆）があると思われるが、虫損により未詳。

＊「端」　本行「故」字。右傍に「端」字（墨筆）を記す。

○或（は）父・母・及―以（ひ）親眷・一處（返）に相（ひ）―會（する）ヲ見（上428、・を・）

○或（は）持明主の諸仙・妙持誦の人（返）ヲ見（上429、・を・）

○或（は）日月（返）「ヲ」呑（ノみ）納（イ）ルト見（上430、・を・のむ・いる・と・）
○或（は）自（ら）［於］屎「ノ」坑（返）に墮（つると）見（上430、・の・）
○或（は）人ノ精（返）（を）飲（み）及（ひ）人ノ肉（返）を
＊契（クラ）ヒ［於］火聚（返）に入（る）ト（上430、・の・の・くらふ・と・）
＊「契」　『大蔵経』では「喫」字とする。
○或（は）女人・［於］身の内（返）ニ入（る）ト見（る）（上431、・に・と・）
○是（返）（の）如（き）等の殊勝の夢（ユメ）ニ見已（らは）應（に）知（返）（る）［應］（再讀）（し）一月及―已（ひ）半月に當（に）成就を獲［當］（再讀）（し）。（上431、・ゆめ・に・）

おわりに

以上が、高山寺蔵『蘇磨呼童子請問経』上巻の仮名加点箇所を対象とした訓読文用例集となっている。これは、先に公開した『大乗本生心地観経』[1]に続くもので、松本氏が提唱する電子データ提供の試み[2]の一環と考えている。

漢語の用語掲出の仕方については、前稿同様に呉音統一という方法をとった。

注1　大久保綾子「訓点資料語彙の電子データ提供に向けての実践的試み―宮内庁書陵部蔵『大乗本生心地観経』巻第八院政期点仮名点箇所訓読文用例集―（「広島大学日本語史研究論集Issue 1」　平成27・3）

2　松本光隆「訓点資料語彙の文脈つき電子データ提供の一試案―高山寺蔵不空三蔵表制集院政期点巻第一仮名点箇所訓読文用例集（稿）一―」（高山寺典籍文書綜合調査団研究報告論集　平成25・3）

その他参考引用文献

三崎良周・林慶仁校註　新国訳大蔵経『蘇悉地経・蘇婆呼童子経・十一面神呪心経』（大蔵出版株式会社　平成14・3）
「SAT 大正新脩大蔵経テキストデータベース2015版」（http://21dzk.l.u-tokyo.ac.jp/SAT/satdb2015.php）
松本光隆「蘇磨呼童子請問経における注釈と訓読」（『日本学・敦煌学・漢文訓読の新展開』　汲古書院　平成17・5）

付記

本用例集は、松本光隆広島大学教授が昭和六十一年に書写・移点した移点本を借用し、底本としたものである。